公共空間の魅力を再点検する

JUDI関西

2020 年第２回　都市環境デザインセミナー

公共空間の魅力を再点検する

～アメリカの状況と居場所論から～

＜記録＞

開催日時　2020 年 7 月 26 日（日）14：00～16：00／Zoom ミーティング

＜目　次＞

１．解題と問題提起：公共空間の魅力論（鳴海邦碩）----------１
２．アメリカを鏡に考える日本の公共空間活用（山納 洋）-------５
３．『居心地の良い場所』は計画できるか？（林田大作）-------１６
４．コメンテーターの意見　その１（笹尾和宏）----------２５
５．コメンテーターの意見　その２（岡絵理子）----------２７
６．コメントへの応答　その１（山納　洋）----------２８
７．コメントへの応答　その２（林田大作）----------２９
８．視聴者の発言----------３２
９．まとめ（鳴海邦碩）----------３４

【講師プロフィール】

林田大作（はやしだだいさく）

大阪工業大学工学部建築学科准教授。1967 年大阪市生まれ。東北大学大学院博士前期課程修了、大阪大学大学院博士後期課程修了。博士（工学）。大林組東京本社設計本部、和歌山大学システム工学部環境システム学科講師・准教授を経て、2010 年から現職。主な著書に「名作住宅で学ぶ建築製図」「建築設計学Ｉ住宅の設計を学ぶ」「都市・まちづくり学入門」（いずれも共著、学芸出版社)、「まちの居場所ささえる／まもる／そだてる／つなぐ」（共著、鹿島出版会）など。主な作品に「TC センター」「キヤノン販売品川本社ビル」（ともに共同設計）など。

山納 洋（やまのう ひろし）

大阪ガス株式会社 近畿圏部 都市魅力研究室長。1993 年大阪ガス（株）入社。扇町ミュージアムスクエア、メビック扇町などで企画・プロデュース業務を歴任。2010 年より大阪ガス（株）近畿圏部において都市開発、地域活性化、社会貢献事業に関わる。一方でカフェ空間のシェア活動「common cafe」まち観察企画「Walkin’ About」などをプロデュース。著書に『つながるカフェ:コミュニティの〈場〉をつくる方法』『歩いて読みとく地域デザイン』（学芸出版社）など。

【コメンテーター・プロフィール】

岡絵理子（おか　えりこ）

関西大学環境都市工学部建築学科教授。京都府立大学生活科学部で住まいについて学び、大阪大学大学院環境工学専攻でまちをつくるすまいの研究をする。都市計画コンサルタント勤務、大阪大学大学院博士後期課程修了。博士(工学)。都市住宅学会関西支部の共同研究として、沿線まちづくり、タワーマンション研究などに取組んでいる。また、研究室として新しい住環境価値を見出すための社会実験に取り組んでいる。

笹尾和宏　（ささお　かずひろ）

大阪大学大学院工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻、経済学研究科経営学専攻、ともに修士。「水辺のまち再生プロジェクト」事務局。「都市空間を自分のものとしてもっと私的にもっと自由に使い合える状況」の推進に向け、水辺をはじめ、路上や公園、公開空地などの公共空間を対象に、生活者目線での実践・提案を行う。キーワードは"NO BORDER, BE WILD"。民間主体による公共空間マネジメントに従事。著書に『PUBLIC HACK 私的に自由にまちを使う』学芸出版社。

解題と問題提起

公共空間の魅力論

鳴海邦碩

はじめに～これまでの経緯

公共空間については、ここ４年ほどセミナーに取り上げて議論を重ねてきています。今日は、今年の2 月にやる予定だったセミナーですが、コロナ問題で延期となり、今に至りました。その点からいえば、問題意識は 2 月の頃の問題意識にあり、コロナの影響をはじめ、その後のいろいろな状況について反映されているとはいえないのでご了承ください。そうした新たな観点について、今日ご参加の皆さんの意見を入れて、議論を発展させていければと考えています。

まず、2017 年には、公共的オープンスペースにおける商活動ということで議論しました。一連のセミナーの記録は、全て関西ブロックのホームページに掲載されていますので、ご関心のある方はぜひ見ていただければと思います。この時は、例えば神戸の闇市についての村上さんの発表など、生きるための公共空間利用の重要性とか、テーマが商業利用だったこともあり、そういうところから全体の発表が組み立てられていました。

翌 2018 年は、改めて公共空間利用の自由利用について考えるというところで、自由という観点を表に出して議論をしました。この時、今日もコメントいただく岡先生と笹尾さんにも発表をしていただきました。この時改めてわかったことは、1973 年に松田道雄さんが、ご存じの方もおられると思いますけれど、お医者さんで児童教育の理論家でもありました、この人が自由空間について論じていました。たぶん日本で自由空間の言葉を使ったのは、この人が初めてではないでしょうか。「昔は、自由空間は子どもに自由のよろこびを与えたが、今（当時）は大学に入ってはじめて自由空間を見つける」と述べています。

翌々年 2019 年、公共空間における「青空市」の役割を再考するというテーマで、最初の年の商業利用と同じ路線ではありますけれど、最近はやりのマルシェとか青空市を中心として議論をしました。地域性にあふれている青空市とか、そうした空間をこれからの町なかに活かしていくためにどうしたら良いかという議論です。「朝起きたら街に出掛ける用をつくる」というのが、キャッチフレーズとして出てきました。なかなかいい言葉だと思います。

そしてちょうど一年ほど前、文系の方にパブリックスペース論を論じてもらいそれを契機に勉強しようということで、篠原雅武さん、この人は哲学の人ですけれども、哲学的な領域で、公共空間というものをどう論じているかについて、お話いただきました。

なかなか深いお話でしたので、簡単にはまとめられませんが、一つの例示として田中一村の話をされました。田中一村は「アダンの木を描くには目には見えない、根付いている部分をも感じさせるように描かなければならない」といったとのことです。謎解きのようなお話ですが、篠原さんはこの話を通じて、表れているものには根っこがあるということを語ったわけです。つまり、パブリックスペースに表れていることには根っこがある、従って現象だけではなく根っこを論じなければならないという観点でした。

今回の問題意識～空間は公共性を帯びている

これまでこうしたテーマでパブリックスペースやパブリック・オープンスペースについて考えてきたわけですが、今回のセミナーをやるにあたって、私の方から解題というか問題意識を説明しておきたいと思います。

大阪の上六にハイハイタウンという再開発ビルがあります。このビルが建つ敷地は、大阪市の公園予定地でした。それが終戦間際の空襲の後、闇市状態になり、その後、不法占拠状態の盛り場となっていました。そこを再開発してこのビルができたわけです。

この時の地元の組合長だった中田さんが、建物完成後次のように述べています。「私が最初にイメージした下町の姿というのは、こういう箱のようなビルではなく、５、６階建てのビルが分かれて建って

いて、その中には複雑な通りがあって、疎水も流れている、そんな感じだったのです」。この文章を読んだとき、どうしてこのような素朴な街のイメージが実現しなかったのだろうか、と思いました。ずいぶん昔の報告書で読んだのですが、今日のテーマを考える上で大事なポイントの一つです。

公共空間といえば、オープンスペースに目がいきますが、空間そのものが公用性を帯びているわけです。先ほどの中田さんが思った違和感というか、問題意識というのは他にもいろいろ指摘する事例があります。アレグザンダーの言葉はよくご存じと思いますが、「人口都市には本質的な構成要素が欠落している」という指摘や、あるいは蓑原敬さんがいう、「新しく開発した都市空間、そこには、たくさんの人間が作り上げていく、微妙な空間の襞、その襞の間に溢れ出す人間のエネルギーというものが感じられない」という指摘も同じだと思います。

関係性が生み出す情景が面白い

公共空間が均質化していく。環境がニュータウン化し、ショッピングモール化し、さらにはディズニーランド化していく。こういった批判とか違和感というのはここ 20 年くらい、ずいぶん大きくなってきたと思います。

計画によって空間の公共的価値が高くもなるし、低くもなる。これは私たち JUDI の会員だったら、みんなよくわかっていることだと思います。その意味で空間はもともと公共性を持つ。さまざまな現れをもたらす潜在的可能性をもった空間、それが公共空間ではないだろうか。もともとそうした性質をもつ公共空間が、経済価値でのみ評価されるようになって変質してきているように思います。そうしたことを下敷きにし、今回このセミナーを企画しました。

昔、1987 年ですが、著書（『アーバン・クライマクス』）のなかで「情景の都市」について論じました。内と外の関係、個と他の関係、表と裏との関係、こうした関係が情景を生み出すのではないか。大阪の路地の長屋の前にある花とか、外と内との関係では窓も重要な要素になる、庇や犬走りなど個々の建物と道路の関係も、また表通りと路地や横町との関係もそうだ。違う様相のものが共存している、そういう空間なり、そういう空間の現れの方が面白いということを述べたわけです。

遠近法的視点やバロック風の秩序立て、超高層ビルが連立する光景、あるいは巨大な吹き抜け空間が示す Placeless な風景、そういうものは公共空間の質、価値としてあまり面白くないと思ってきました。

図 1（上）　ハイハイタウンの外観
図 2（下）　再開発以前の状況

図 3　長屋の前にある花　野田　大阪市

それで、アレグザンダーの「人口都市には本質的な構成要素が欠落している」といった表現に同感していたわけです。

テーブルとイスが出たパリの横丁、屋台村も同じような雰囲気がある。それからアーケードも面白い。公共と私の空間が結びついている。先斗町の軒下空間、よくわからない空間だけど面白い。お祭りを見ている表座敷と表の通りの関係とか。

ちょうどその頃、立松和平が、人を魅きつける都市について次のように書いていて、同じ感性を感じました。

「都市は現世と他界とで構成されている。明かりのついた表通りの商店街が現世としたら、その裏にある悪場所としての盛り場が他界である。昼間の公園が現世だとしたら、夜の公園は他界だ。住宅街が現世だとしたら、この中にある商店街は他界だ。（中略）都市はそのような他界と現世とが複雑に構成されて成立しているのである。人を魅きつける都市は、必ず現世と他界とが同時にあり、人は意識もせずに二つの世界を簡単に行き来している」（『ヤポネシアの旅』1986）。

このような環境のとらえ方について、オギュスタン・ベルクが『都市の日本』の中で論じています。「近代の風景、とりわけ都市のそれを設定するために必要な、距離をとるあの眼差しが日本人には欠けている」。「日本人の感性においては、都市的なものは美的なものから切り離されている（ジャン・ベルを引いて）」。都市の風景の描写が日本の現代文学できわめて稀なのは、当り前の風景だからである（奥野健男を引いて）」。拙書『景観からのまちづくり』にも触れています。私はそこで、「景観問題を考えるうえで重要なのは、＜見る＞景観なのか、そこに＜生きる景観＞なのかと、ということである」と述べています。オギュスタン・ベルクはこのような環境のとらえ方は日本人固有のものではないかといいたいわけです。

公共空間の均質化、グローバル水準化

しかし、環境とのかかわり方、ベルクは景観意識と捉えていますが、かかわり方は変化している可能性があります。ロバータ・グラッツは、「アメリカでは多くの若者が、歩道やカフェ、人で一杯の通りをもった都市というのは、映画の中や外国の都市、あるいはバカンスの場所でのみ存在すると思っている」（『Cities』）。東浩紀が「海外の観光地にあるショッピングモールに滞留する人種や国籍を超えた人々～～彼らはモノを消費することによって連帯している」（「思想地図βvol.1」2010）。もう世界

図4　テーブルとイスが出たパリの横丁

図5　小店、黒石市

図6　祭りを見る表座敷　城端

中が、ショッピングモール化、ディズニーランド化といった同じ価値観になっているのだという見方があります。環境意識のグローバル水準化です。日本もそうなってしまっているのかもしれない。

今日の狙いは、以上に述べた問題意識というか、公共空間とのかかわり方、あるいは公共空間の価値づけについて、新しい目で点検して欲しいというところにあり、山納さんと林田さんにお願いしました。山納さんは、自己紹介もあるかもしれませんが、『歩いて読みとく地域デザイン』を出版されて、アメリカでエリアマネジメントなどを勉強してこられたようですので、そういうことを反映してお話いただきたいと思います。それから、居心地の良い場所については、林田さんは、建築設計に関わってこられていて、一方でまちの居場所ということについて、研究をされてきていますので、そういった観点からテーマについて論じて欲しいとお願いしました。

あと、2018 年のセミナーでプレゼンテーターになっていただいた笹尾さんと岡さんにコメントをいただくというのが組み立てですので、よろしくお願いしたいと思います。その後に、オンラインで参加していただいている視聴者の方からご意見をいただきたいと考えています。応答し合うところまでいきませんが、ご意見は記録として残したいと考えています。それではよろしくお願いしたします。

図 7　そして軒下に“よぉわからん空間”が発生する。先斗町　地域景観づくり計画書　神戸啓

図 8　USJ　ハリーポッターエリア

図　シンガポールのショッピングモール
https://www.visitsingapore.com/ja_jp/editorials/your-guide-to-shopping-in-singapore

アメリカを鏡に考える日本の公共空間活用

山納　洋

「アメリカを鏡に考える日本の公共空間活用」というお題をいただき、30 分ほどお話をさせていただきます。僕は大阪ガス㈱にいて、現在大阪ガス㈱近畿圏部に所属しています。2018 年から 2019 年までアメリカのボストンケンブリッジにいました。ハーバードケネディスクールのフェローとしてアメリカの都市政策などをいろいろと調べてきました。

今日は３つの話をさせていただきます。最初に、いい感じの空間、心地よい空間と言われているものについて。そして、２番目にニューヨークの状況。3 番目にアトランタの状況を。

鳴海先生からもあったように、クリストファー・アレグザンダーさんという方が『パタン・ランゲージ』という本を書いておられます。町をつくるための共通言語としてのパタン・ランゲージには、建物の個々の部分、建物全体、町全体などのいくつかのレイヤーがあり、活き活きとした町、建物を生み出すためにはそのパターンに従って都市をつくることが望ましいという考え方を示しています。

アレグザンダーはウィーンで生まれ、イギリスのケンブリッジで数学を学んだ後、アメリカ・ハーバード大学に渡って建築をされた方ですが、『都市はツリーではない』という本を先に書かれ、その後に『パタン・ランゲージ』を書いています。前著では近代になって計画的につくられた都市はツリー構造をしているが、人々が快適で暮らしやすいと感じる都市はセミ・ラティス構造を持っていると論じ、後著では具体的に 253 のパターンを写真で示しています。街路・お店・広場・公共空間などで人々がどう活き活きと過ごしているのかを示しています。

公共空間に非常に関わりがあり、人の賑わいや人の密度に関係のある写真が多いことが見てとれます。路上のカフェやビアホール、屋台があったり、建物の前に座れる階段があったり。こんなこともパタン・ランゲージには含まれているのですね。

図１　パタン・ランゲージ

続いて、これは『マゾヒスティック・ランドスケープ』という、コミュニティデザイナーとして有名な山崎亮さんも関わったランドスケープエクスプローラというチームが、都市の中で「パブリックだなぁ」と感じるような“新鮮さ”“意外性”“おもしろさ”を備えた空間を集めたもの集です。この本では空間を「貢献するエゴイズム」や「民営化」など、13 のカテゴリーに分類しています。「ヤクルトランド」は 3 時で銀行が閉まった後にヤクルトのおばさんが座り、周りに年配の方々が集まるコミュニティスペース、「居酒空間」は階段に座ってお酒を飲んでいる風景、タバコとか囲碁とか将棋を楽しんでいる空間、「階段シアター」というものもありますが、もともと計画されたかどうかはさておき、都市の中で人々が空間をどう使いこなすのかというパターンを見ているのがの『マゾヒスティック・ランドスケープ』でした。

図２　マゾヒスティック・ランドスケープ

僕が去年書いた『歩いて読みとく地域デザイン』、これは僕が 2014 年からやっている Walkin‘About という、90 分間みなさんに勝手に歩いていただき、見聞を紹介していただくまちあるきを通じて見えてきたものをまとめています。その中で、人々が心地よいと感じている環境を紹介しているのですが、これをパタン・ランゲージ的に紹介してみるとこういう感じになります。並木があって非常に良い感じの昔からの参道、川が流れていて、その周りに散歩したり、ランニングしたり、魚取りをしている人たちがいっぱいいる風景。地域のご老人たちが道に集まっていたり、京橋の「とよ」というお酒が飲める屋外空間などが示されていますが、こういうものが自然発生的に出来るパターンと、計画をもって賑わいを作ることに成功しているパターンがあります。

図３　歩いて読みとく地域デザイン

心地よい空間、公共空間をどうデザインするのかということは、後程の林田先生にお任せをしまして、僕はこの辺のところをさらうだけに留めて、次の章に進みたいと考えています。

次はニューヨークの話です。ニューヨークとアトランタの話を続けざまにします。こういう心地良い空間、公共空間を都市に再現させるとどうなるのか、政治的な意味合い、経済的な意味合いで何が起こるのかという話にシフトしていきます。

ニューヨークのロウワーマンハッタンに、ワシントンスクエア、ユニオンスクエア、トンプキングスクエアという３つの広場公園があります。そんなに距離は離れていません。左の真ん中に 555 ハドソンストリートと書いてあるピンがあります。ここはジェイン・ジェイコブズが住んでいた家があった場所です。ニューヨークの南の方のこの３つの広場はそれぞれどう違うのかを見ていきたいと思います。

図４　ニューヨーク・ローワーマンハッタンの３つの広場

図５　ワシントンスクエア

まずはワシントンスクエア。噴水があって後ろに凱旋門のような門があって、奥に通りが続いています。通りがこの広場に突き当たる形になっています。色々な人が色々なアクティビティを持ちこんでいる様が見て取れます。みんなで歌ったり、踊ったり、端の方でトランプでかけ事をしていたり。色々なアクティビティがここにはあります。自発的に色々なものを持ち込んで良いとなるとアメリカの人たちはこんなに公共空間をうまく使いこなすんだなと見える空間です。

図６　ジェイコブズ vs モーゼス

ここはジェイン・ジェイコブズがロバート・モーゼスという、ニューヨークにおいて道路公園や橋の建設などの公共の大規模プロジェクトをどんどん推し進めて、一方で貧困の近隣をどんどん潰してしまった開発の立役者に対抗して市民を組織して、このワシントンスクエアを守る活動をしたわけです。だからかもしれません、自分たちで獲得した広場を使いこなしているという様が見て取れた感じがします。ジェイコブズの『アメリカ大都市の死と生』には、彼女が暮らしているハドソン通りに 24 時間の間にどんな人がやってきて、どんなことをするのかが長々と綴られている箇所があります。自分がごみバケツを出しに行った時に中学生がやってくるとか、近所の金物屋さんや雑貨屋さんが出てくるとか、アパートの管理人の奥さんがどうというようなことが、ここに引用した５倍くらいの長さで描写されています。この街路において人々が出会い、ささやかなコミュニケーションを行う。そういうことがアーバンビレッジである所以であると。こんなニューヨークの住みよい町を開発で潰すべきではないという論調で彼女は書いています。

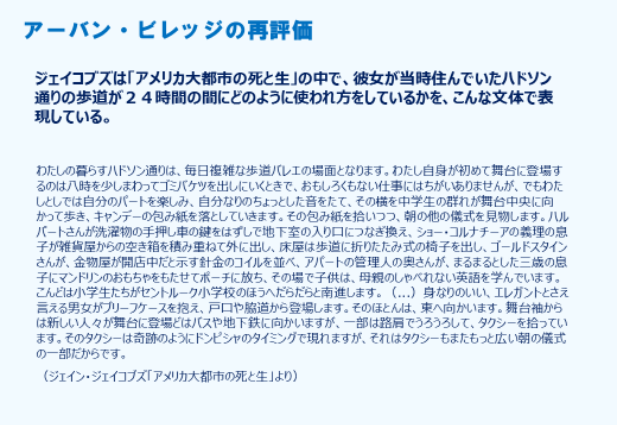


図７　ジェイコブズのハドソン通りの描写

ジェイコブズがこの本を書いたのは 1961 年ですが、シャロン・ズーキンという社会学者の女性が最近『NAKED　CITY（邦題：都市はなぜ魂を失ったか）』という本を書いていて、その中でジェイコブズを批判しているのですが、そこではオーセンティシティ（真正性、正統性）とい言葉を使っています。簡単に言いますと、ジェイコブズが見出したアーバンビレッジとしてのニューヨークの素晴らしさ、移民の方々が住んで彼らが彼らの文化を保ちながら、ふれあいながら暮らしている、その様を美しく書き過ぎたのではないかと。それに魅かれた人たちがどんどんニューヨークに住み、結局地価や家賃が上がるということが起きて、長らく住んでいた住民を追い出す結果につながったのではないかということです。

図８　シャロン・ズーキンの批判

現在（コロナ以前の）ニューヨークは、かなり家賃が上がってきていて、追い出されてしまう人たちも増えてきている中で、アーバンビレッジの良さを訴えること、都市の公共空間が素晴らしい空間になることの結果として何が起こるのか。50 年前の話のダメ出しをしているような話ですが、それをよく考えないといけませんと言っているように思えます。

ハドソン通りにある、かつてジェイコブズが住んでいた家。2009年に350万ドルで売られている。

図９　ジェイコブズが住んでいた家

この写真の左側、茶色い小さな建物がハドソン 555、元々ジェイコブズが住んでいた家ですが、この家が 2009 年に 350 万ドル（約 4 億円）で売られています。

この通りがまさに、ハドソン通りのバレエの舞台だった場所

図１０　ハドソン通りのバレエの舞台

別の角度から見たこの写真では今工事をしているところがそうです。手前に花屋、その手前にレストランがありますが、この通りがまさにハドソン通りのバレエの光景を日々織りなしていた街区と思われます。

8thアベニュー沿いに残されていた、絶滅危惧種レストラン

図１１　ジェイコブズ家近くの絶滅危惧種ダイナー

次の写真は、すぐ近くにこんな絶滅危惧種が今でもあったと思い写真に収めてきたダイナーです。ここで食事したのですが、10 ドル、1000 円ほどの値段で食事ができる。昔はたぶんこんな雰囲気だったのでしょう。今はもっと高級なものが増えてしまっているニューヨークですが。

ユニオンスクエアでは、週４日ファーマーズ・マーケットが開かれている

スクエアが安全な場所になったことで、周囲には商業施設や高級マンションが

図１２　ユニオンスクエア

次はすぐ近くのユニオンスクエアです。この広場はBIDが運営している広場として知られています。週に 4 回ファーマーズマーケットが開かれています。ここでは生産地管理、どこ産の何々ということを謳って出店をしている事業者を集めています。ブランド化しているわけですね。ここに農産物や雑貨を買いに来る人たちが集まる風景です。後ろに高級そうなマンション、コンドミニアムが建ち並んでいます。このユニオンスクエアは、実は1975年にBIDに運営が渡されています。この年にニューヨークは破産をしかけているのですが、その時に市に電気とガスを供給するコンソリディテッド・エジソンという会社を中心とした地元企業が BID（Business Improvement District：ビジネス改善地区）を立ち上げて公園の管理を自ら行うようになりました。この公園も犯罪が多く危ない場所だったそうですが、犯罪とごみの問題に取り組むため、各参加企業から分担金を集めて、警備、清掃活動を行い、ファーマーズマーケットを定期的に開催してこの公園の感度を上げていったのです。

図１３　市の財政破綻から生まれたBID

非常に危なかった場所が良い場所に変わっていく。市がお金を出さなくても民間、地元企業が運営してくれるわけですから、良いことずくめに思えます。環境が劇的に改善されたというプラスの評価を基本的には受けているのですが、アメリカの都市計画、社会学の方は日本の方よりもこのことを若干シニカルに捉えているようです。ズーキンはユニオンスクエアパートナーの方が 2006 年に語ったこの言葉を指摘しています。「我々はつねにある種の人々を魅きつけようとしている。それは若く、金持ちな消費者である」この公園が全ての人たちが出入り可能な公共空間というよりも、若く金持ちな消費者を集めたいという意思を持っていると。そうなったときに豊かな人しか受け入れられない場所になるのではと、シャロン・ズーキンも含めて多くの人が懸念を表明しているのです。

1980年代に文化的反体制派たちが闘っていたトンプキンズスクエア

図１４　トンプキンズスクエア

東８番通りに残されている労働者向けアパートメント

図１５　トンプキンズスクエア近くの街区

最後がトンプキンズスクエア。先ほどの２つに比べるとあまり賑わってない暗い感じのする広場です。ここは1980年代に文化的反体制派たちが闘っていた公園で、すぐ近くの街区はこんな感じです。手前の焼き鳥大将の方が目立っていますが、いわゆるテネメントと呼ばれる、5階建てのかなり古い、労働者が住んでいた長屋が続いています。この辺りはレントリストリクト（賃料統制）の法律が今でも生きている。1971年以前から居住権を持っている人は家賃が上がらず、ニューヨークなのに今でも数百ドルの家賃で住めていることもあり、そんなに豊かでは

ない層も暮らしています。かつてはヨーロッパからの移民、アーティスト、作家、詩人、ミュージシャン、ヒッピーなどが暮らしていて、ドラッグや犯罪などの危険はあったものの、オーセンティックな場所として知られていた。1988 年にホームレスの男女がここを占拠し、当時のエド・コッチ市長が追い出さざるを得なかったそうです。不法占拠という行為自体も「公共空間は誰のものか」という問いを発さざるを得ない状況ですが、今後は富裕層でいっぱいの公園になっていく可能性もあるわけです。こんな３つの公園がすぐ近くに存在するのがニューヨークのローアマンハッタンなのです。

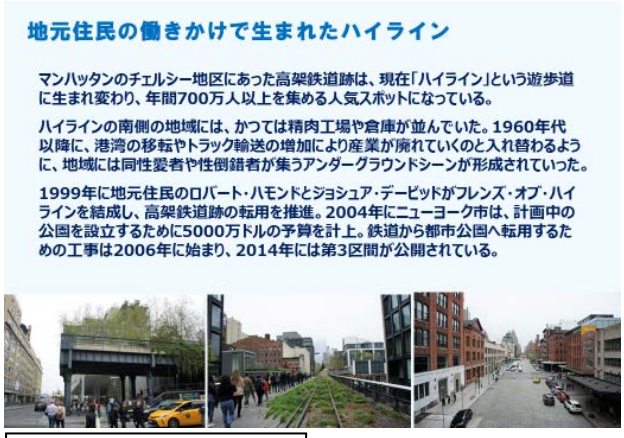


図１６　ハイライン

次の事例はハイラインです。マンハッタンのチェルシー地区、先ほどのローアマンハッタンから西の方に高架鉄道跡があり、ここが公園遊歩道に代わり、年間 700 万人を集める人気スポットになっています。この東側の地区にはかつて精肉工場、倉庫が並んでいて、すぐそばの港から積み下ろした精肉をここでパックし、出荷するという産業の地だったのですが、港や船が大型化して外の方に出ていくにつれて、ここは産業の文脈から外れて、アンダーグラウンドシーンが形成されるような倉庫地域に変わっていきました。1999 年に地元の住民二人がこの高架鉄道跡を転用して地域を活性化させようと活動を始めます。ニューヨーク市は 2004 年にここに予算をつけ、鉄道から都市公園に転用しようという工事が 2006 年に始まっています。ハイラインの整備は主に民間が行っているわけですが、すぐ近くはこういう高層マンションがバンバン建っています。

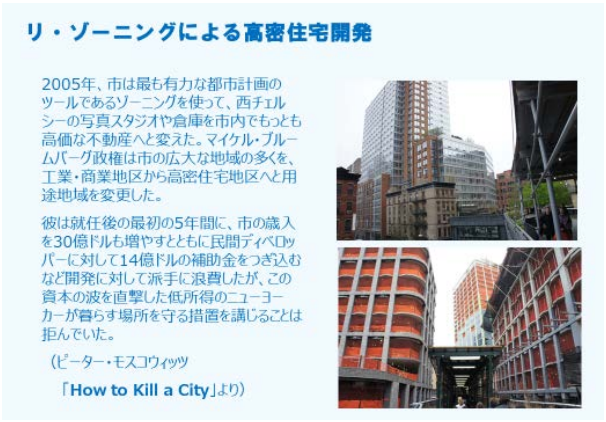


図１７　ハイライン周辺の高密住宅開発

2005 年当時、ニューヨーク市長はマイケル・ブルームバーグというミリオネアで開発促進派でしたが、彼がハイラインの計画に合わせて近隣の用途を工業・商業地区から高密度の住宅地区に変更して、高層コンドミニアムを建ててもよいことにしました。そのことで、ハイラインの周辺は雨後のタケノコの如く、こういう住宅が建ち並ぶ地区に変わってきています。このことにで、固定資産税はどんどん市の財政を潤すようになっています。一方でブルームバーグは補助金をどんどん民間ディベロッパーに渡していました。ニューヨークは 1975 年の財政破綻以降、もともとの繊維の産業の地から、いわゆるファイヤー（FIRE）、ファイナンス（F）：金融、インシュランス（I）：保険、リアルエステイト（RE）：不動産を街の主要な産業に変えていく政策を取り続けているのですが、それを後押しする政策をこのように取っていました。

図１８　ハドソンヤード

これは去年オープンしましたハドソンヤード。高層の建物が建っています。ハイパー・ジェントリフィケーションと呼ばれる家賃の高騰がこの街では起こりつつあります。ミッドタウンのある地区では、一続きの 3 ブロックで 57%が一年のうち 10 か月は空いているそうです。大金持ちがコンドミニアムを投資目的で買って実際は住まず、不在地主率が非常に上がっているのです。金持ちが買って住まない住宅のために長年住んできた住民が追い出されるという状況が深刻化しているとニューヨークで聞いてきました。

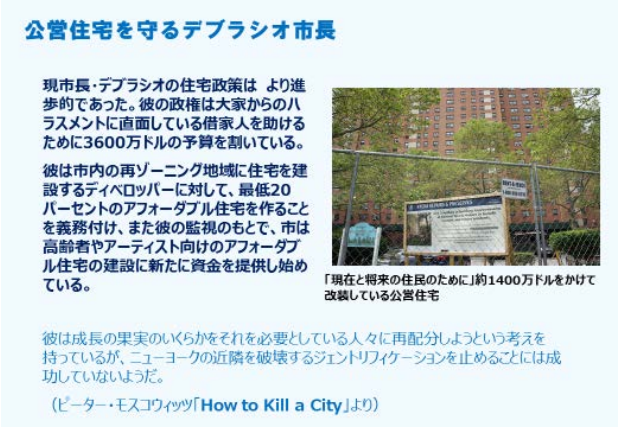


図１９　公営住宅を守るデブラシオ市長

デブラシオ市長について最後に触れます。彼は父親がドイツ移民、母親がイタリア移民、奥さんが黒人という多国籍な市長なのですが、ブルームバーグよりも進歩的な考え方を持っています。リ・ゾーニングによる開発促進をする一方で、公営住宅の補修にお金を使ったり、ディベロッパーに対して最低20%のアフォーダブル住宅、中所得・低所得の人たちも住める住宅をそこに入れることを義務づけたりしています。ジェントリフィケーションは起こり続けていたわけですが、その中でニューヨークがいかに多くの人に住み続けられる町であり続けるかということにデブラシオ市長は腐心していると見受けられました。

図２０　アトランタ地図

最後にアトランタの話をします。この辺りの中心部分がダウンタウンで、右上の方にベルトラインがあります。元々は鉄道の敷地跡だった場所に自転車やランニングができる道と公園を造っている。その辺りとイーストアトランタには白人がどんどん流入しています。一方で西側にはイングリッシュアベニュー、ビッツバーグという黒人の貧困層が今でも住んでいる地域があります。ここにスペルマン大学という、創設当初から奴隷から解放された黒人の教育に力を入れた大学がありますが、その近くで 2016 年に始まった「マーディーズ」というシェアキッチンの話から始めたいと思います。

図２１　シェアキッチン「Marddy's」

僕はケイトラ・ベイツという黒人女性が、裕福ではない黒人地区に女性が料理を作ってあちこちに売りに行ける、みんなで使えるシェアキッチンを作ったというネットニュースを見て、これは会いに行かないとと思い、去年の４月と６月にアトランタを訪れました。彼女は以前にはピザカフェを営んでいま

したが、家主が家賃を上げたことで、出ていかざるを得なくなり、店を閉めた後にこの物件を買ってシェアキッチンを作っています。つまり、ジェントリフィケーションの当事者なのです。

Marddy's店内。店主一人一人が保健所の許可を取り、テイクアウト商品を製造できる。

図２２　「Marddy's」店内

彼女がケイトラ・ベイツ。女性と男性が写っていますが、女性はベンダーと彼女が呼んでいる女性です。店主一人ひとりが保健所の許可を取り、色々な所に自分の作った料理を売りに行けるようにしています。ジェントリフィケーションの話ですが、先ほどのニューヨークのハイライン同様にベルトライン周辺には白人がどんどん戻ってきています。高級そうな住宅が周りにじゃんじゃん建ち、周辺の地価が上がっています。これは白人富裕層の都心回帰を促すという政策でそうしているのだろうと思います。

ヒストリック・フォード・ワース公園。すぐ近くを通るベルトラインの効果か、周囲にはコンドミニアムが林立。

図２３　ベルトライン近くの公園

これはベルトラインのすぐ近くにある公園ですが、噴水が上がり、道があって自転車に乗っている人とランニングをしている人が写っています。後ろの方には高級コンドミニアムが林立している風景が見てとれます。質の良い公共空間プラス高級住宅というセットをアメリカでよく見ましたが、こういう方程式がアメリカにはあるようです。

イーストアトランタのコミュニティ公園では、毎週木曜日にファーマーズ・マーケットが開かれる。

図２４　コミュニティ公園

ここはイーストアトランタのコミュニティ公園。毎週木曜日にファーマーズマーケットをやっています。写っているのはほとんど白人です。アトランタの人種構成は 50 数パーセントが黒人なのですが、この地域には非常に白人が多くなっています。アトランタは郊外居住、スプロールがかなり進んだ地域で、車で 30 分、1 時間かかる遠くに多くの白人が住んでいますが、最近ベルトライン開発が進んだことで中心部に裕福な白人が戻ってきています。

イングリッシュ・アヴェニュー地区。都市再生から取り残された近隣。

図２５　イングリッシュアベニュー

一方でこの写真はイングリッシュアベニュー、黒人貧困地域側からダウンタウンの方向を写しています。荒涼とした風景の中に、黒人男性がひとりぽつんと所在なく立っています。

「No Loitering（うろつくな）」と書かれた家

図２６　「No Loitering」と書かれた家

次もそのすぐ近くです。森の中に住宅があり、「No Loitering（うろつくな）」と書いてあるのですが、この辺は先ほどのケイトラ・ベイツから「ここから先は一人で行っちゃ駄目」と言われた地域です。実際二人くらい、薬物中毒であろう人が視線も合わずに歩いている風景に出会いました。アトランタにはそんな地域もあります。

そんな地域の一つで、ビッツバーグヤードという鉄道貨物敷地跡の開発が進められています。この開発はちょっと興味深いので、いろいろと見てきました。ここには公園、オフィス、作業場、住宅などが造られる予定です。地域の貧困の人々が働ける場所をつくるというインクルーシブな開発を目指しています。アニー・E・ケイシー・ファウンデーションという、国際宅配便業を営むＵＰＳの創業者が作った財団法人が土地を購入し、地域の方々のためになる場所を作ろうと公共的開発をしているのです。ケイトラもこの開発に一部関わっていて、建物の中にベンダーの女性たちが営むカフェやショップスペースを作ろうとしていました。僕も工事現場に入れていただき、こんな風景を眺めてきました。

ベルトラインプロジェクトのそばで、ビッツバーグヤードという鉄道貨物敷地の開発が進んでいる

ビッツバーグヤードには地元の人が働けるオフィスや作業場、住宅、公園などが設けられる

Marddy's も、ビッツバーグヤードにキッチンや食品を販売するスペースを出店する予定だった

図２７　ビッツバーグヤード

その北側にはピッツバーグという、黒人貧困層が暮らす近隣地区があります。写っている家は板打ちされている空き家です。打ち捨てられて人が住まなくなっている住宅。手前側は教会の敷地の一部で来た人にハンバーガーやチャリティグッズを配っている風景です。

ピッツバーグ地区。教会の前で近隣の人々に食べ物やチャリティグッズを無償で提供していた。

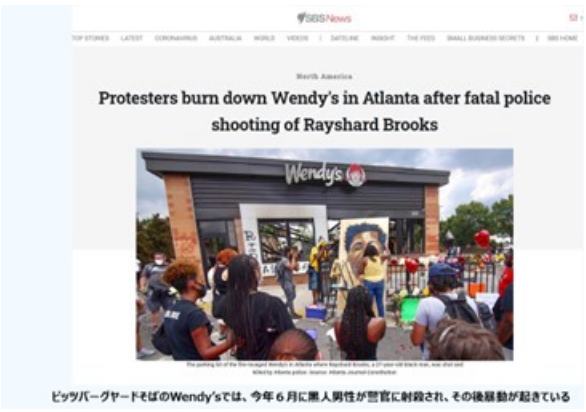
図２８　ピッツバーグ近隣地区

ピッツバーグ地区で出会ったおじさんと嘆る、Marddy'sのケイトラ・ベイツ

彼はフロリダで家を追い出され、妻と二人で空き地にテントを張って暮らしていた。

図２９　ピッツバーグで出会った黒人男性

この地区にケイトラと一緒に入っていった時に、このおじさんと出会いました。写真の後ろに「ストップ・ジェントリフィケーション」と書かれた立札が写っています。この地域に入ってくるな、裕福な人は来ないでくれと。この男性は実は地元の人ではなくて、フロリダから流れてきた人でした。奥さんと二人で家を追い出されてここに来て、空き地にテントを張って住んでいて、「かなわんな」というような顔をして写っています。やはり僕一人で入ったら危ない地区だそうですが、こんな風景の中で暮らしている人たちがいるのがピッツバーグ。そこでこういう開発が進められているのでした。



ピッツバーグヤードそばのWendy'sでは、今年６月に黒人男性が警官に射殺され、その後暴動が起きている

図３０　ウェンディーズの駐車場

コロナウィルスの感染症拡大で、アトランタも非常に大きな被害を受けています。感染症拡大の一方で、黒人男性ジョージ・フロイドが 5 月 26 日にミネアポリスで白人警官に殺された後に全米で暴動、そして抗議行動が起きています。その後 6 月に同様の事件がアトランタでも起きました。27 歳の男性、レイシャード・ブルックスがウェンディーズの駐車場で警官に撃たれて亡くなったのですが、その後、このウェンディーズは焼き打ちに遭っています。写真にはウェイシャード・ブルックスの壁画が描かれ、追悼されている風景が写っています。ちなみにこのウェンディーズは先ほどのピッツバーグヤードの開発地のすぐそばにあります。アトランタという場所では、ジェントリフィケーションが起きていて、インクルーシブな開発も進められていて、黒人の低所得の人たちが自助努力で、小さな起業家として立ち上がるのを応援している女性がいて、でも今年になってコロナ、そして人種抗議運動によって激震が走っているのです。

最後に締めくくりとして。アレグザンダーのパタン・ランゲージに見られるような、人々が心地よいと思う環境を作るためのリテラシーを日本もずいぶん学んできているのではと思っています。アメリカを鏡にと言った時に気になるのは、人々の愛着を得る豊かな環境を作り出したときに、裕福な人々のために公共空間が閉じてしまうこと、都市の人口動態を変容させてしまう可能性があることを認識しないといけない。その上で全ての人が平等に暮らすこと

ができる、公共空間からの利益を享受できる。永く暮らし続けてきた近隣にとどまり続けられる場所をつくる。そういうソーシャルデザイン的な観点から開発について配慮する必要があるということを学んできた次第です。

図３１　分断された都市

最後にひとつ宣伝です。アメリカで滞在している間に出会いました、『THE DIVIDED CITY（分断された都市）』という本を翻訳をしまして、学芸出版社さんから今年 10 月に出版いただく予定です。アメリカの人種の話、不平等の話、そして開発の話と関わることが多く書かれていますので、ぜひお読みいただければと思います。ご清聴ありがとうございました。

『居心地の良い場所』は計画できるか

林田大作

1. はじめに

はじめに、自己紹介をします。私は、生まれは大阪で、育ちが奈良です。大学は東北大学に行き、仙台で学部・修士課程の 6 年間を過ごしました。専門は建築計画と設計ですが、当時から『居心地の良い場所』に興味を持っていて、アフォーダンスについても調べていました。歴史が好きで、地域の歴史や地域の資源、「ここにしかないもの」を学生時代から興味を持って研究していました。

修士課程修了後、株式会社大林組に入り、そこで様々な建築物を設計しました。2000 年に退職し、大阪大学で「都市生活においてオフィスワーカーが構築する『場所』に関する環境行動論的研究」という論文をまとめ、博士学位を取得しました。

その後、和歌山大学で 6 年間勤め、大阪工業大学に転任し、今年で 11 年目になります。早いもので、教員生活は今年で 17 年目です。

2. 公共空間利用と『居心地の良い場所』

さて本題ですが、まず「公共空間利用と『居心地の良い場所』から始めます。このテーマは、博士課程以来ずっと研究していますので、今回の発表のお話をいただいた時は、自分がこれまでやってきたことを振り返る意味でも、良い機会をいただいたと思い、張り切ってまとめてみました。

私は、1993 年から 2000 年まで、主に新築の建築物の設計をやっていましたので、自分が設計した、あるいは関わった建築物は、竣工後にこっそり見に行きます。そうすると、計画・設計された新しい空間、すなわち構築環境では、うまく説明できないような人びとの行動が見られます。設計者が、施主や行政庁と入念に打ち合わせをして、ある程度までユーザーの空間利用をイメージしながら、そのような空間や環境を設計・デザインするわけですが、特に公共空間においては、計画・設計側の人間から見ると、「そんな空間利用は想定していなかったよ！」というような現象が見られました。

したがって、我々は「三次元の物体」としての建築物や都市空間だけを作るのではなくて、公共空間に「現象＝コト」を埋め込まなくてはならないと感じています。それは、地域固有の社会や文化、公共性、人びとの生活、出来事、記憶といった目には見えないもの、「モノ」ではない「コト」も設計していかなくてはいけない。そして、そのような「コト」に目を向けていかなくてはならないと強く思いました。

今回は公共空間、つまり「SPACE」に関する問題提起がなされているわけですが、私の担当は、「SPACE」を「居心地の良い場所」、つまり「PLACE」にしていくにはどうすれば良いのかということを中心に話します。

公共空間を考える上で、私自身がとても影響を受けた『日本の広場』という本があります(**図 1**)。

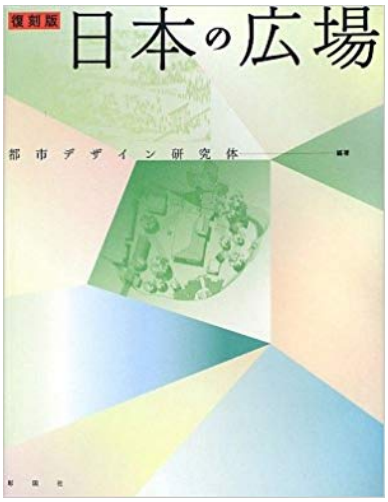


図 1 都市デザイン研究体著:復刻版　日本の広場, 彰国社, 2009 年

学生にも薦めている本なのですが、この本の内容は、かつて『建築文化』という雑誌に連載され、大きな議論を呼んだことなのです。1960 年台後半から 1970 年台初頭にかけて、ちょうど大阪万博が開催された年の前後に議論された、かなり古い内容です。それを紐解いてみると、「日本には広場はなかった。いや、世界中のどの村にも広場はなかった。」ということが書いてあります。「あるのは、祭礼のための仮設的な空間だけである。」と続きます。そのような空間は、日常的には人びとが往来し、立ち話をするような「道」でしかないのですが、非日常、つ

まりハレの日には「広場」が出現します。

この本には、「人間の生活のための場が、「モノ」としての空間を伴って自然発生する。」ということが書かれています。それが日本の広場なのだと。

例としては、一揆。いきなりすごい例を出すなと思いますが。それから、祭りやデモ、集会など。これらは、非日常のイベントですね。

それとはちょっと区別する形で、日常的な井戸端会議や洗濯場が例として挙げられている。そういうところが日本の広場になっていくと書いてある。要するに、自然発生的な「現象＝コト」が空間（モノ）を伴って広場化したものが日本の広場であるということが書いてあります。

この本の良いところは、広場の例が示してあるところですが、古い本なので、今はどうなっているのかということに興味がわき、写真を撮ってきました。研究者として、証拠（エビデンス）を示すこと、現場で確認することは大切なことです。本に書いてあることを鵜呑みにせず、「本当にそうなっているのか？」と疑いながら、確認するわけです。

先ほど山納さんからアメリカの話がありましたが、欧米では合理的かつ合目的的に、ゼロから都市を構築していく姿勢が見られます。日本における建築教育やアーバンデザイン教育も、多分に欧米の合理主義に影響を受けながら、近代以降の教育が整えられていくわけですが、実は、日本人は今ある「モノ」をうまく使って、そこに場所を発生させることがとても得意な民族であると感じます。

写真 1 仮設的な祭礼空間（ハレ）（神社境内＋道路（道路占有許可））, 大阪市都島区, 2019 年

写真 2 仮設的な祭礼空間（ハレ）（神社境内＋道路（道路占有許可））, 大阪市都島区, 2019 年

写真 1・2 は、「日本の広場」に出てくる「祭礼空間」です。普段は道路ですが、お祭の日だけ道路占有許可を取って、このように夜店やお神輿が出るわけです。今年はコロナ禍のため、このようなイベントはできないのですが、これらの写真は去年のちょうど今くらいの時にやっていた近所のお祭の風景です。祭礼の時だけ広場になる公共空間の例をよく表していると思います。

写真 3 は、橿原神宮の稲荷です。これも、「祭礼空間」ですね。このような空間は、日常的にも『居心地の良い場所』になっていると感じますので、「ケ」的な『居心地の良い場所』と言えると思います。

写真 3　日常（ケ）的な「居心地の良い場所（神社境内）」, 奈良県橿原市, 2019 年

ここで私が問題にしたいことは、「ハレ」の日にイベントが開催されているときは、賑わっていて、お店も出ますし、都市空間的にも公共空間的にもうまくいくのはよくわかるんですね。しかし、問題は「ケ」だと思います。「ケ」的な『居心地の良い場所』にスポットを当ててやってみようというのが私の研究姿勢です。

「ケ」的な、日常的な、何でもないような『居心地の良い場所』というのも、探してみるとやっぱりあるんですね。

写真 4 は、親子とおぼしき二人の後ろ姿です。声はかけず、後ろからそっと写真を撮っています。この写真で二人が引き立ってくるのは、背景としての河川敷にポイントがあると思います。河川敷を背景として、二人が居心地良さそうにしている。また、絵になる風景です。二人が仲良さそうですし、人びとと空間が見事に調和していると感じます。

写真 4　日常(ケ)的な「居心地の良い場所(河原)」, 大阪市, 2019 年

写真 5　日常(ケ)的な「居心地の良い場所(河原)」, 大阪市, 2019 年

写真 5 は、奈良県桜井市で撮影しました。高校生のカップルですね。夕陽を浴びて、何もない空き地の端っこに座って何かしゃべっている。ここには元々ボーリング場があったのですが、今は取り壊されて更地になっている。日常（ケ）の何気ない風景なのですが、私がスポットを当てている「ケ」的な『居心地の良い場所』というのはこのような感じです。

写真 6 は人が写っていないのですが、私が妻とよく一緒に行く中崎町のカフェです。**写真 7** は SANAA 設計の金沢 21 世紀美術館です。公共敷地の中にもこのような「ケ」的な『居心地の良い場所』があります。

これらの写真を見ていると、日本人の空間利用は、公と私が曖昧であり、綯い交ぜになっているような気がします。もちろん、無秩序ではありません。そこに『居心地の良さ』や親和性を感じるということは、そこに秩序はあるのだろうと私は思っています。逆に、そこにある秩序を読み取るべきなのだろうとも思います。

写真 6 日常(ケ)的な「居心地の良い場所(屋内)」, mumokuteki café, 大阪市, 2019 年

写真 7 日常(ケ)的な「居心地の良い場所(公共敷地)」, 21 世紀美術館, 金沢市, 2019 年

日本人が欧米人と明らかに違うところは、日本人は靴を脱いで住居の中に入るところです。しかし、靴を脱げば「私」の空間、靴を履けば「公共」の空間なのかと思いきや、先ほど鳴海先生が提示された「住居の中から前面道路へ植栽があふれ出す」ようなことが起こります。

このように、日本人の空間利用は、公と私が曖昧であり、綯い交ぜになっていて、パブリックスペースやコモンスペースに私的な行動がどんどんにじみ出てくる。ここが、日本人の空間利用の面白いところかなと思っています。

それから、これは言葉の問題なのですが、行動は「コト」であり、ソフトです。そういうソフトが、「間」という空間、つまりハードとプラスされて、空間の名前、呼称になっていることも面白いと思います。寝る空間だから「寝間（ネマ）」とか、居る空間だから「居間（オリマ）」とか。「オリマ」とは「リビング」のことです。東北地方では、「常居（ジョイ）」と言います。「常居（ジョイ）」も「リビングルーム」なのですが、東北は寒冷地方ですから、多数の部屋を暖房するよりは、一室を暖房して、そこに家族みんなが「常に居る」方が効率的なので、

このような呼称になったのだと思われます。

あとは、「作業場」や「仕事場」も、その空間でおこる人びとの行動（コト）に「場」がプラスされてできた呼称であると説明できます。

住居は外部から身を守るシェルターですが、日本の民家では、ネマ・ナンドのみがシェルターになっています。これは日本の温暖な気候によるところが大きいと思います。気候の激しい地域に立つ民家はシェルター的ですが、日本には四季があって、中間期は屋外で過ごしても気持ちが良いので、屋外の公共空間で『居心地の良い場所』ができるのでしょう。

そのような日本人の公共空間利用が、2014 年のゲール・インパクト(**図 2**)によって変わったのではないかとよく言われるのですが、私は、日本人の公共空間利用のベースは変わらないのではないかと考えています。

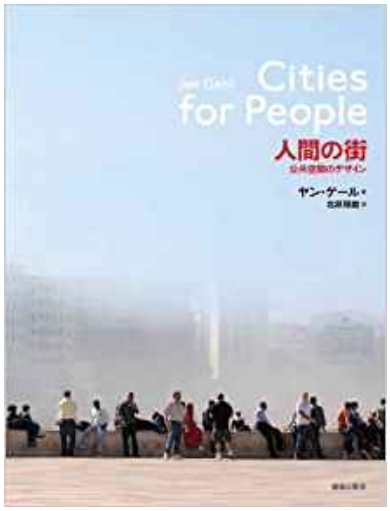


図 2 ヤン・ゲール著，北原理雄訳：「Cities for People 人間の街　公共空間のデザイン」，鹿島出版会，2014 年

賑わい、祝祭以外の日常的な「ケ」的な空間利用の場面では、人びとは「特に何もしてない。」「さしたる目的があるわけでもない。」と言えると思います。しかしながら、決して無意味、無機質ではない生活行動が見られます。私は 2000 年くらいからそこに着目して研究してきました。人びとが都市環境の中に『居心地の良い場所』をみつけて、つくって、使いこなす行動（コト）の方が、器である空間（モノ）よりも大切なのではないかと考えたわけです。

人びとと空間、人びと同士の親和性が、日本の公共空間の『居心地の良さ』のベースになっているのではないか。ということは、それを計画・設計しようとすると、物理的な三次元的空間（モノ）のみならず、そこで起こる日常・非日常のアクティビティ・イベントを包み込むような考え方をしないといけない。その時にキーとなるのが、アフォーダンスという概念だと思います。

3. アフォーダンスにあふれた都市環境

アフォーダンスという言葉は、J. J. ギブソンの造語です。人びとにとって、「～できそうだ」という知覚を引き起こす環境の資質と説明されます。私は、2001 年、このアフォーダンスの概念を使って、137 名のオフィスワーカーの『居心地の良い場所』調査をしました。そして、「なぜその場所は居心地が良いのですか？」と質問しました(**図 3**)。

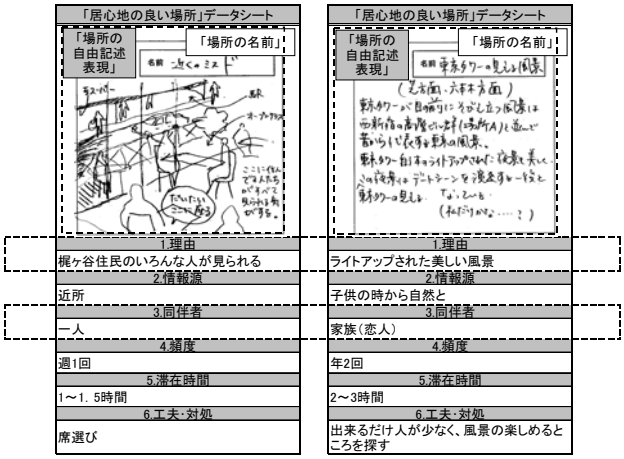


図 3 オフィスワーカーを対象とした「居心地の良い場所」調査（東京圏 90 名・大阪圏 47 名，計 137 名，454 箇所），2001 年

それを集計して、ひとつひとつ分析してみると、「～できるから」という行動・活動（アクティビティ・イベント）の可能性、「～という気持ちになれるから」という心理的状態の可能性が抽出できました。これは、どちらもオフィスワーカーが日常生活の中でみつけたアフォーダンスになっていることに注目してください。自由記述欄も設けて、描画表現もできるようにしましたので、かなりの数の『居心地の良い場所』をギャザリングでき、研究が進みました[文 1)]。

人びとが都市環境のなかに、「ここで～できそうだ」「ここで～という気持ちになれそうだ」と感じられる空間をみつけ、使い熟し、『居心地の良い場所』にしていくという現象が、都市環境の質を向上させるトリガーになっていると思います。

図 4 は、かなり時が経ってから、重い腰を上げて、

少し寝かせておいたものを「エイヤ！」とまとめたものです。

『居心地の良さ』を規定する要因として、だいたいよっつくらいがあり、ひとつ目は「～できる」「～という気持ちになれる」というアフォーダンスの概念で説明できる『居心地』です。ここには、空間と人びとの親和性があります。何も手がかりになるものがない砂漠のような空間よりも、手がかりとして、木のような「モノ」がある空間の方が、「居つける」「落ち着ける」。そのほうが、空間と人びとの親和性が形成されるということです。

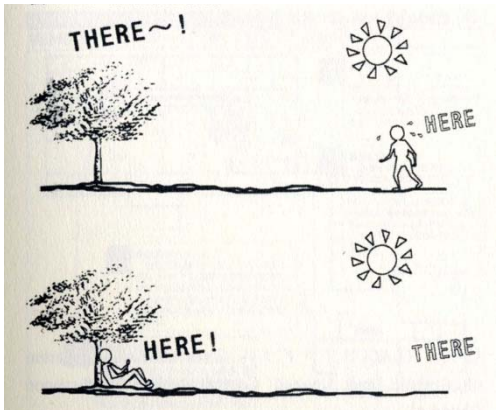


図 4 HERE 感覚と THERE 感覚（渡辺武信「住まい方の実践」, p242, 1997 年より）

図 5 では、「他者や主（あるじ）が居ない」ことが『居心地の良さ』を規定していますが、**図 6** では逆に、「主（あるじ）が居る」ことの方が『居心地の良さ』を規定しています。**図 5** は「二人きりになれる」ことがポイントであり、**図 6** は「学生時代から知っているマスターがそこに居る」ことがポイントです。ふたつ目とみっつ目は相反しています。

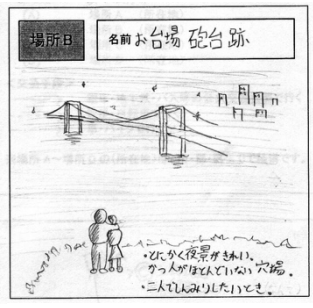


図 5 オフィスワーカーを対象とした「居心地の良い場所」調査, 2001 年

図 6 オフィスワーカーを対象とした「居心地の良い場所」調査, 2001 年

よっつめは、公共空間でよく問題になる場面を示しています。公共空間では、「自分と他者との社会的了解」が『居心地の良さ』を規定します。

図 7 は、寄藤文平さんの「東京メトロのマナーポスター」です。左端と中央のポスターでは、公共空間には似つかわしくない、場違いな行動が見られ、「自分（左端では自分たち）と他者（周囲の人びと）との社会的了解」が形成されていないことがわかります。このような人びと同士の関係性が公共空間の『居心地の悪さ』につながるわけです。

ところが、右端のポスターでは、一見チャラい恰好をしている男性が、なかなか良いことをやっています。その上には「またやろう。」とあります。「このような状況では、このような行動がマナーである」という「自分と他者との社会的了解」が形成されると、公共空間の『居心地』がどんどんよくなっていきます。人間の持って生まれたセンスや、対人関係的な能力も関係してくると思います[文 2) 3)]。

図 7 東京メトロのマナーポスター, 寄藤文平, 2009-2010 年

4.『まちの居場所』と都市環境デザイン

次に、『まちの居場所』に話を進めたいと思います。ここ 10 年くらいは、本を 3 冊書きながら、都市環境に『居心地の良い場所』をつくるメカニズムのようなものを考えてきました。人びとが都市環境の中に『場所』をみつける／つくるという段階があり、さらに、それらの『場所』をささえる／まもる／そだてる／つなぐという段階があることに気づきました[文 4) 5)]。

図 8 と**写真 8** は、奈良県桜井市で 2012 年から継続的に取り組んでいる「歴史的まち資源」を活用したプレイスメイキング・居場所づくりの取り組みです。私は、奈良で高校卒業まで過ごしましたので、故郷の歴史的部分も含めて愛着を持って調査でき、非常に楽しい作業でした。

地元の方にとっても、地域に残る「歴史的まち資

源」を掘り起こし、今必要な『居場所』をつくり、今後につなげていくにはどうしたら良いかを考えることは、非常に意味のあることですし、当事者意識も芽生え、かなり盛り上がりました。

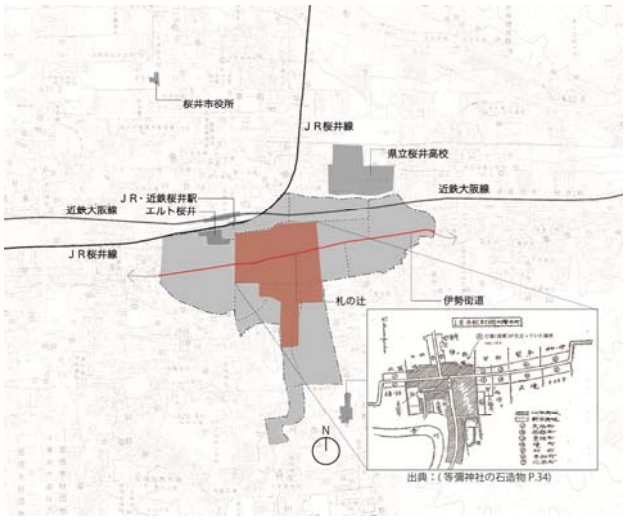


図 8 奈良県桜井市桜井駅南側エリア 建物外観悉皆調査，2014 年

写真 8 奈良県桜井市桜井駅南側エリア 残存町家実測調査，2014 年

桜井駅南側エリアには、東西に旧伊勢街道が走っていて、昭和 45 年頃は、アクティビティとイベントにあふれたまちだったのですが、今はシャッター街になっています。このようなエリアで、昭和 15 年に建造された空き町家をみんなでリノベーションし、『居場所』をつくりました(**写真 9･10**)。この町家は、この年開催された「奈良・町家の芸術祭 HANARART2013」というイベントの桜井会場とするべくリノベーションしました。イベントの後は、ゲストハウスにするという計画です。

この町家に若い芸術家に住んでもらって、住民と交流しながら作品を作ってもらうという「アーティスト・イン・レジデンス」をやりました。企画・設計段階から、芸術家、この町家のオーナー、まちづくり協議会のメンバー、奈良県職員、そして私と私の研究室の学生でワークショップをやりました(**写真 11･12**)。

写真 9 旧永船邸 昭和 15 年建造，2013 年 6 月

写真 10 佐藤邸(旧永船邸)，2013 年 11 月

写真 11 旧永船邸の新オーナー佐藤宮司･まち協メンバー･アーティスト･大学による WS，2013 年 8 月

写真 12 旧永船邸改修計画(手前:現状，奥:改修案，模型制作:大阪工業大学林田研究室)，2013 年 11 月

この古い空き町家（旧永船邸）を買い取ったのは、地域の神社の宮司さんです。宮司さんはオーナーで

あり、建築設計でいえばクライアントなのですが、リノベーション後のこの家をゲストハウスとして使うのは一般の人びとなので、宮司さんとだけ打ち合わせを行うのではなく、まちづくり協議会のメンバーや奈良県職員、そして、この家に住まいながら作品をつくる芸術家も参加してワークショップをやりました。

特に注意したことは、この家の玄関をまちに開くために、玄関を入ったところに土間を作り、中庭まで入って来られるようにしました。ここを「まちの居場所」にして、HANARART の桜井メイン会場とし、奈良県立大学の学生さんに受付をやってもらいました(**写真 13**)。地域のイベントとアクティビティのための『場所』をみんなでつくったわけです。

写真 13 奈良・町家の芸術祭 HANARART2013 桜井メイン会場受付, 2013 年 11 月

桜井市では、コミュニティカフェも作りました(**写真 14**)。このエリアはシャッター街で、生鮮食料品を売るお店も少ないので、移動スーパーが来ます。移動スーパーが来る日時はあらかじめ知らされているので、移動スーパーがここに来る時だけ、人びとが集まってきます(**写真 15**)。日常生活に欠かせない生鮮食料品を買いに行けない「買い物難民」がたくさんいます。このエリアに住む高齢者が多いのですが、彼らにとっては、ここが日常生活に必要な『場所』になっていて、ケのアクティビティの場でもあるということです。**写真 14** は、このような元青果店をリノベーションしたコミュニティカフェです。

写真 14 旧井田青果店リノベーション「櫻町珈琲店」 コミュニティカフェ, 2018 年

写真 15 空き店舗「旧井田青果店」と移動スーパー「とくし丸」がつくる「居心地の良い場所」, 2015 年

移動販売がつくる『居心地の良い場所』の実例は、近年増えてきました。**写真 16** は、東京国際フォーラムのガラス棟とホール棟の間の公共空間に停まっているキッチンカー（移動販売）です。私は東京国際フォーラムガラス棟の施工に携わったので、この空間の使われ方にも興味を持っていたのですが、使われ方が近年変わってきたように感じます。他の公共空間でも、キッチンカーが集まってきて、イベントを開催することが当たり前になってきました。

写真 16 キッチンカー（移動販売）, Foodtruck mag. 職業:フードトラックな人たち HP(https://foodtruck.mellow.jp/media/tips/1)より

旧井田青果店のリノベーションの際にも、移動販売がまちづくりに欠かせないアイテムになってきたと感じていましたので、私の研究室の学生に模型を作ってもらって、私が基本設計のスケッチを描きました(**写真 16・図 9・10**)。

残念だったことは、このエリアは準防火地域であり、板貼りの木の表しの外壁はダメと指導されました。それから、玄関にはシャッターレールを設け、防火シャッターで閉められるようにしなさいという指導もありました。補助金を使って『居場所』をつくるのだから、現行の建築基準法に合わせなさいという指導でした。現在は既存建築物に対する法規制がもう少し柔軟になってきましたが、まだこの時は、それが出来ない状況だったので、ちょっと残念な思

いをしています。**写真 17** は、指導通りに手を入れた後の写真です。**写真 14** と見比べてみてください。

写真 16 旧井田青果店改修計画(左:現状, 右:改修案, 模型制作:大阪工業大学林田研究室), 2016 年

図 9 旧井田青果店改修計画(立面図(ファサード):林田大作), 2016 年

図 10 旧井田青果店改修計画(アクソノメトリック図:林田大作), 2016 年

写真 17「櫻町珈琲店」コミュニティカフェ 木の表し外壁はダメ・玄関に鋼製シャッターを設置, 2019 年

写真 18 は、誰が設計したのか、長い間不明でしたが、私どもで調査した結果、武田五一の弟子で、奈良で最初に設計事務所を開設した近代建築家、岩崎平太郎の設計した銀行であることがわかりました。

一目見て、ただならぬ建築物であることは誰もが認めていましたので、桜井に残る貴重な「歴史的まち資源」であり、木造モダニズムでもあるこの銀行を、コミュニティレストランにリノベーションしました。木製建具なども残っていて、ぜひ再利用しようということになりましたが、「櫻町珈琲店」での失敗もありましたので、今度は失敗しないように、木製建具を再利用できる戦略を立てました。

ただ、耐震的には問題があったので、中には鉄骨を入れて耐震改修しています。竣工式には、市長にも来ていただきました。現在、登録有形文化財に申請しており、今年度中に登録される予定です(**写真 19**)。

このように、地域の「歴史的まち資源」を利用しながら、『居場所』をつくっていくことは、非常に意義深いことだと感じています。

写真 18 旧吉野銀行桜井支店, 岩崎平太郎設計, 昭和 5 年建造 地域に残る木造モダニズム建築, 2015 年

写真 19 旧吉野銀行桜井支店」リノベーション「ル・フルドヌマン櫻町 吟」 コミュニティレストラン, 2019 年

5.ルイス・カーンの「ROOM」の概念

これまで、日本人の公共空間利用の特質について、実例を挙げながら、人びとが『居心地の良い場所』や『居場所』をみつけ、つくる行動と、結果としてできた空間がどのようなものであるかを紹介してきました。そのなかで、日本の公共空間は、計画的というよりも、どちらかというと非計画的であり、自然発生的であると述べました。

では、計画的にゼロから空間を作っていく欧米の建築家は、非計画的・自然発生的な『場所』や人びとがみつけ、つくっていく『居心地の良い場所』や『居場所』については何も言及していないのかというと、実はそうでもありません。

ルイス・カーンは、多数の「フォームドローイング」を残しています。**図 11** は、カーンが「Room の概念」を示した「フォームドローイング」として特に有名です。上部に「Architecture comes from the making of a room.」とあり、直訳すると、「建築はルームを作るところから自然発生する。」という意味になります。また、その下には、「ルームからなる共同体は住む、働く、学ぶなどのための良い場所である。」とあります。さらに、下部には、「ルームとは心の場所である。」とあります。

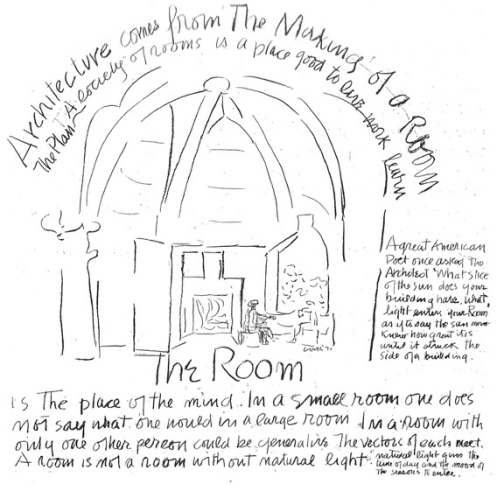


図 11 カーンの「ROOM の概念」, ウルス・ビュッティカー著, 富岡義人・熊谷逸子共訳:「ルイス・カーン 光と空間」, 鹿島出版会, P13, 1996 年より

カーンの「フォームドローイング」や言説を調べてみると、先ほど述べたアフォーダンスについても、カーンは「availability」という語を使ってほぼ同様のことを言っていることがわかります。

また現在、公共空間で問題になっている「「SPACE（空間）」はあるのだけれど、「ROOM（良い場所）」にならない」という点について、カーンはひとつの方向性を投げかけているように思えます。それは、「建築や都市の計画・設計とは、「SPACE（空間）」を建築することではなく、「ROOM（良い場所）」を建築化することである。」と読み取れます。

これを私なりに言い換えてみると、「ハレのイベント、ケのアクティビティのための『場所』をみんなでつくることが求められている」ということだと思います。

「ROOM」は「空間・場所」という意味ですが、「ROOM」の語源を調べてみると「WOMB」、つまり「女性の子宮」や、「TOMB」、つまり「死んだ人が入る墓」だと言われています。生きている人びとが居る「ROOM」は、「余地」や「機会」、「可能性」や「アフォーダンス」です。「ROOM」とはそのような概念であるということを考えると、公共空間は、今後生まれてくる人びとにとっては「WOMB」でなくてはならないし、我々が「TOMB」に入ってしまっても、我々の子どもや孫の世代が、様々な「余地」「機会」「可能性」「アフォーダンス」を感じられる公共空間を残しておく必要があるのではないかと思います。

6. おわりに

公共空間は、過去から未来へつながっていくものです。2019 年時点で、日本の空き家は約 846 万戸あると言われています。したがって、私は、地域に残る空き町家を「歴史的まち資源」として見直し、みんなの『居場所』や『居心地の良い場所』にしていくべきだろうと考えています。

時間が来てしまいましたので、ここまでにして、これで私の発表とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

関連文献

1) 林田大作, 舟橋國男, 鈴木毅, 木多道宏 ; 『場所』の様態表現に関する基礎的分析―都市生活者の「居心地の良い場所」に見る人間－環境関係の研究―, 日本建築学会計画系論文集 第 579 号, pp45-52, 2004 年 5 月
2) 林田大作 ; オフィスワーカーの『居心地の良い場所』『居心地の悪い場所』における行動場面の分析, 日本建築学会大会（関東）学術講演梗概集 E-1 分冊, pp.21-24, 2011 年 8 月
3) 林田大作 ; オフィスワーカーにとっての「サードプレイス」, 建築と社会, vol.92, No. 1069, pp.17-18, 社団法人日本建築協会, 2011 年 4 月
4) 日本建築学会編 ;「まちの居場所 まちの居場所をみつける／つくる」, 東洋書店,2010 年 11 月
5) 日本建築学会編 ;「まちの居場所 ささえる／まもる／そだてる／つなぐ」, 鹿島出版会,2019 年 9 月

コメンテーターの意見　その１

水辺のまち再生プロジェクト　**笹尾和宏**

2018 年のセミナーで話題提供させていただいた笹尾と申します。当時は「自由使用」というテーマのもと話題提供の機会をいただきました。自分自身の興味も「自由使用」にあって、人がまちなかで私的に自由に過ごしていたり、まちを勝手に使っていたりする風景が魅力的だと日々思っています。具体的には山納さんがご紹介されたワシントンスクエアの様子や林田先生がご紹介された肩を寄せて座るカップルの様子などです。この視点で 3 点コメントします。

１点目が「サードプレイス」です。「サードプレイス」自体は、市民それぞれが自身の都市生活において居心地よく感じられる「インフォーマルな公共生活が起こる場」をもう少し社会一般に伝わりやすく表現したある種のキャッチコピーです。居心地の良さが生まれるには、気の置けない他人との会話があることが成立条件とされています。

それに対して、また違った居心地の良さを感じられる環境として、会話を前提とせずに居心地の良さを感じられる「インフォーマルな公共生活」もあるんじゃないかと感じています。「弱いサードプレイス」と言えるのかもしれません。今回、コロナ禍で外出自粛要請がある中でも人は外へ出ていたわけですが、なぜ家の中に閉じこもることが辛くなるのか、家の中にこもりながら反芻する中で至った考えがあります。それは、「自分が社会的に存在しうるという実感を持ちたい」という欲求が私達には備わっているのではないか、というものです。何をするわけでもなくその場に身を置いて他の人の振る舞い・営みを眺めていられるのは、「自分がその場所に留まることを許されていると実感する」ことにつながります。そうして、他人との会話が無くとも心穏やかにその場所に居て、弱いつながり・居心地を感じられるのではないか、特に公共空間はその欲求を満たす機能を果たすのではないかと思っています（写真１）。2018 年のセミナーで鳴海先生から話題提供いただいた「負の連帯感」という表現がありますが、その感覚が具体的にイメージできたような気がしました。

著書「PUBLIC HACK」では、公共空間の少し尖った使い方を紹介していますが、時折「誰かにうらやましがられたいとか他の人よりも巧く空間を使いたいとか、つまり人の目がないと張り合いがでないのでは？」という質問を受けることがあります。その指摘自体は否定するものではないし、むしろ外で何かをする醍醐味の１つではあるんですが、でも「目立ちたい」とか「ひけらかして優越感を得たい」とかじゃない何らかのモチベーションが自分の中にあることは確かでした。それが何か突き止めることができずに答えに苦しんでいる時期がありました。最近、それが自分自身の自覚・実感に依拠した社会との弱いつながり・消極的な社会的承認なんだとようやく言い切れるようになりました。

「サードプレイス」と公共空間の居心地については、今回のテーマで特に言及がなかったことが不思議に感じたので、言い残されていることがあれば伺いたいとも思っています。

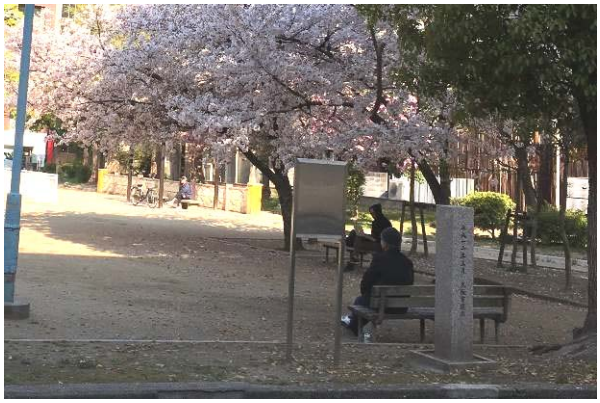


写真１　街区公園で１人でベンチに座る住民（大阪市）

２点目は「ジェントリフィケーション」です。山納さんのパタン・ランゲージの挿絵一覧のスライドを眺めていると、人の立ち振る舞いや生活の様子がパタンのイラストの中に描かれている事に気づきました。その後に紹介のあった「マゾヒスティック・ランドスケープ」や「歩いて読みとく地域デザイン」で紹介されたパタンの写真でも人が写りこんでいました。パタンは「そこで暮らす人」の生活を前提としているのだろうと思ったのです。

ただ、パタンがビジュアルを伴わずに言語のみで

表現される場合は「そこで暮らす人」が現れてきません。そうなると、パタンはアレグザンダー氏の意図から遠ざかり、使い手に都合よく解釈されるようになります。都市開発によるジェントリフィケーションは「そこで暮らす人」が居なくなる事態を招きますが、それはこうしたパタン・ランゲージの誤用によっても起こりうると思いました。

「ハイパー・ジェントリフィケーション」という表現がありましたが、「そこで暮らす人」の入れ替えまで起こってしまう経済的インパクトの大きいジェントリフィケーションが取りざたされる一方で、来街者が変わるという「小さなジェントリフィケーション」もあると認識しています。都市開発には従前（ビフォー）／従後（アフター）が付き物なので、「小さなジェントリフィケーション」が起こるのは当たり前であり、あまり社会問題視されにくい動向です。ただ、今日のような公共空間をテーマとする機会では着目すべきと思っています。近年「公共空間の魅力化ための民間活力導入」というケースを良く目にしますが、公共空間がその利用者を自ら選ぶことについてはもう少し慎重に考えてもいいのではと思っています。

写真２　民活導入が検討されている扇町公園（大阪市）

3 点目は出来上がる風景と空間との関係性についてです。林田先生が「公共空間に表出する人びとの行為には、うまく説明できないものが散見されるが、それらは地域の社会・文化・公共性と人びとの生活・出来事・記憶に裏打ちされたものである」とまとめられているスライドがありました。2019 年の篠原雅武先生によるセミナーでのリゾーム（根っこ）への言及に通じる概念だと思いました。

それが都市に表出したものが山納さんからご紹介のあったアーバンビレッジでの一日の描写だと理解しました。そこでは、一つの地点でどんな行為・営みが繰り広げられてくかが抽出されていましたが、仮に地点を固定せずとも、アーバンビレッジの住民が 1 日の中で目にする他の住民の行為・営みとして切り取っても、同様に鮮やかに移り変わっていくものだろう、つまり、人びとの行為・営みはその地点に依拠したものではなく、地域の文化とか習慣とか生活様式に起因するのだろうと思います。

そう考えると、冒頭ではワシントンスクエアの様子を「とても魅力的だ」と述べましたが、その魅力は人のおかげなのであって、空間のおかげではないと言えてしまえるのではと思いました。今日のテーマに対抗する物言いになりますが、「居心地の良い場所があるというわけではなくて、その場所で居心地よく過ごせる人がいるだけのことではないか」という筋道です。

となると、公共空間の居心地には空間デザインへの配慮が不要なのか、という問いが立ち上がるわけですが、きっとそうではなく、むしろ、空間は人が「居心地よく過ごせて、生活行為が表出する」ための下支えになる必要があるのでしょう。では、どういう空間ならそこを訪れ使う人の居心地が良さを高め、どういう空間なら普段の生活行為をそこでやりたいと思えるのか。そのヒントは、林田先生が「秩序」「アフォーダンスの 4 分類」とご説明された箇所と関係しそうです。つまり、アフォーダンスの 4 分類をパタン化することによって、人々が居心地よく過ごせるための秩序を空間に備えさせるための手法を言語化できるのかもしれないという仮説を持ちました。

コメンテーターの意見　その２

岡絵理子

鳴海先生の「ねらい」を受けて、さらに発展したご発表いただきありがとうございました。

私が 2018 年にこのセミナーでお話をさせていただいたのは、研究室での「カフェ・おカフェ」の活動でした。公園でカフェをすることによって、カフェをしている側がとても幸せになり、またそこにちょっと寄ってコーヒーを飲む人が現れ、その人がちょっと幸せになる。そんなことを思ってはじめましたが、学生たちが特に気を使っていたことは、カッコよくやること。その日にはいつもの自分の好きな服ではなく、カフェらしい服を選んでくるとか、お揃いの小さなエプロンをつけるとか。カフェスタンドのデザインも木と木綿といったナチュラルな素材にこだわっていました。そこでの振る舞いも「いい景色をつくる」というのが合言葉のようになっていました。自由に使うことが保証された公共空間だけど、独りよがりになっちゃいけない、誰も不快にしちゃいけない、そういうことに気を配っていたのだと思います。千里ニュータウンの公園にふさわしい、ということも考えたように思います。

改めて、山納さんが紹介されたパターンランゲージに挙げられている写真は、どれも見ていてほっとするような景色を「人」が作っているという共通点があります。林田先生が「ケ」のような公共空間として紹介された、一人二人で公共空間を専用するというものも。人が大事ですね。

改めて、居心地の良い公共空間は作れるのかと言う問いには、場所と、時間と、人が関係していて、どれも欠けるわけにはいかないと言うことだと思います。山納さんのお話に、ジェイコブスが愛した公園も、お金持ちのものになっているという話がありました。地価が上がってしまって、そこに住むことができないと。でも、公共空間のいいところは、お金持ちでなくてもそこにいることはできるということだと思います。この写真は、ニューヨークの屋内型の POPS（Privately Owned Public Spaces）です。マンハッタンのリンカーンセンターの近くなので、高級住宅地だと思います。この POPS は、タワーマンションの１階にあり、日本で言うところの公開空地です。どれだけ人々に使われるかが大事だから、ニューヨークのホームページには、POPS の分布図が載っています。ここは屋内なので POPS だということがしつこいまでに貼り付けてあります。ガラス張りで中までよく見えるようになっていて、カフェになっています。座っているおじさんは、およそこのマンションの住人とは思えない姿です。住人は座っているおじさんの横を通り抜けて、奥のエレベーターホールに入って行きます。この空間を私はとても不思議な気持ちで見ていました。

千里南公園のおカフェで、くつろぐ私

大阪の「てんしば」では、将棋をやっていたおじさんたちは、公園の隅のほうに追いやられているそうで、「てんしば」には入らないそうです。

公共空間の質というのはだれがどのように図るのか、質を保つことは必要なのかについて考えているところです。

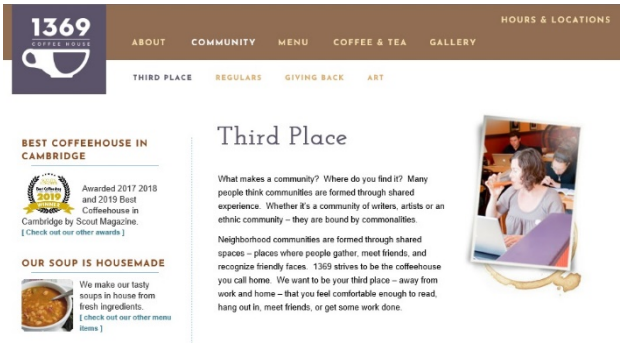
ニューヨークのタワーマンション１階の屋内型 POPS

コメントへの応答

山納　洋

では、僕から。まずサードプレイスの話が笹尾さんからありました。アメリカに行って驚いたのが、サードプレイスという言葉を聞いたのが、10 か月の間に 1 回だけなのですね。家から 7、8 分のところにあるカフェに「ここはサードプレイスです」とホームページに書いてある。それ以外にほぼ聞かなかったです。一方、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学の近くなので、学生がいっぱいいるのですが、学生を除く黒人とかヒスパニックの人はほぼカフェにおらず、大体白人かアジア人なのです。黒人の人たちはダンキンドーナツで見かけます。これは何故なのだろうと人に聞いてみたら、それは安いからとか文化が違うからといった理由のようですが、いろいろな人が自由に出会う場所ってアメリカではとても難しいことなだと思いました。レイ・オールデンバーグという、サードプレイスという概念の提唱者は 80 代の社会学者の方なのですが、都市政策、都市計画の授業を受けたり、ディスカッションをしている中では全くそういう言葉を聞かない。毎日聞くのは、アフォーダブルハウジングとジェントリフィケーションでした。なので、現在のアメリカにおけるイシューではないのではとすら思ったのです。『The Great Good Place』という本に驚いて、僕らはサードプレイスを信じてきたのですが、当のアメリカはそんなこと考えていないのではというのが正直な感想でした。

それに関して。今日のニューヨークとアトランタの話から、アメリカはジェントリフィケーションが起こっていて人が追い出される町という印象を与えてしまったような気がしますけれども、ジェントリフィケーションが当面起きそうもない町、中心部のほんの一部だけで起きていて、あとは、アトランタのさびれた方の町のように、衰退している町が結構あります。大多数といえるかも知れません。ですから、先ほど笹尾さんからあった「小さなささやかなジェントリフィケーション」という言葉、日本でいうと都市再生とか地域再生という言葉で語られる。だから、何かしないと衰退してしまう地域を少しずつ良くするために、こういう場の力を使うということは、日本においては真っ当なことなのかなと思いますし、逆にジェントリフィケーションが起きるような町って、世界規模で動いている経済の中心地になっているのではないかと。東京やコロナ前の京都にはそういう要素があったのかも知れませんが、もしかしたらジェントリフィケーションを起こすことが難しい、ジェントリフィケーションからも見放されているのが日本かもしれないという視点をもう一つ持っておかないといけないのではという感想を今は持っています。空間に関しては、みなさんにお任せしようと思います。とりあえず以上です。



ケンブリッジ市にある「1369 coffee house」（開業:1993 年）はコンセプトとして“Third Place”を掲げていた。勉強している学生が多いが、地域の人たちも集っていた。

コメントへの応答　その２

林田大作

まず、なぜ「サードプレイス」というキーワードが出てこなかったのかというご質問にお答えします。先ほどの奈良県桜井市におけるプレイスメイキング・居場所づくりの取り組みの続きになるのですが、このエリアのなかに、「旧前田布団店」という空き店舗がありました(**写真 1**)。そこを、まちづくり協議会が「桜井本町たまり場」という名前に変えて、コミュニティセンターのような、みんなの『居場所』にしました(**写真 2**)。

写真 1 旧前田ふとん店，奈良県桜井市，2012 年

写真 2 桜井本町たまり場，奈良県桜井市，2013 年

私がこのエリアの調査を始めた 2012 年当時、この動きを目の当たりにして、「「たまり場」って、とても素敵な名前をつけたなあ」と感心しました。その時に思い出したのが、レイ・オールデンバーグの「The Great Good Place」という本でした(**図 1**)。

図 1 Ray Oldenburg:「The Great Good Place」, Marlowe & Company, New York, 1989

図 2 レイ・オールデンバーグ著，忠平美幸訳:「サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」」，みすず書房，2013 年

この本の和訳が 2013 年に出ましたが、当時はまだ和訳が出ていませんでした。しかし、私は、「The Great Good Place」を読んでいましたので、表紙に記載されていた「HANGOUTS」を思い出しました。「HANGOUTS」は、日本語では「たまり場」という意味です。「The Great Good Place」は、初版が 1989 年であり、私がこの本に出会ったのが 2000 年くらいです。その時は、英語で読んだのですが、「Third Place」という言葉が頻繁に出ていた印象がありません。少なくとも、表紙には出ていません。どういう言葉が出ているかというと、「HANGOUTS AT THE HEART OF A COMMUNITY」という言葉が出ているのです。

2013 年に「サードプレイス」というタイトルで和訳が出ました(**図 2**)が、この時にも、副題に「コミュニティの核になる『とびきり居心地よい場所』」という言葉が入っています。

この和訳をよく読むと、レイ・オールデンバーグが 1989 年当時に言いたかったことがよくわかります。彼は、「Good Place」、すなわち「良い場所」が重要だと言いたかったのだと思います。具体的には、カフェやコーヒーショップ、本屋やバーやヘアサロン、そして、忘れてはならないのが、その他の「HANGOUTS」。これが「たまり場」です。

これらのことは、「The Great Good Place」(**図 1**)の表紙に小さい字で書いてあります。

もちろん、「The Great Good Place」のなかでは、「サードプレイス」の概念についても論じられているのでしょうが、オフィスワーカーにとっての「サードプレイス」だから、働いていない人は除外されるのではないかと、私は「The Great Good Place」を斜めに構えて読んでいました。

しかし、2013 年の和訳を読んでみると、レイ・オールデンバーグは、オフィスワーカーのことだけではなく、コミュニティのことを結構書いていたんだなと気がつきました。コミュニティがコミュニティとして成り立つためには、人びとの生活がある程度の密度で集まった時に、生活の拠点となる『場所』が居心地良くないと、それはコミュニティにならないということが書いてあります。そのような『場所』が、インフォーマルな公共の集いの場であって、人

びとが出会って言葉を交わす場所であるということも論じられている。

現在、コロナ禍の一方で、経済を回さなきゃとみんな一生懸命なわけですが、レイ・オールデンバーグは、1989 年当時、ニュータウンのショッピングセンターはコミュニティのためになることを一切しないと書いています。日本の現状に照らし合わせると、奈良県桜井市などは、その例にぴったりと当てはまると考えられます。郊外にショッピングセンターが建ってしまって、地元の商活動が廃れてしまうという現象は、桜井市だけではなくて、全国的に見られます。

そういう現象に歯止めをかけるのが、「サードプレイス」という概念なのではないでしょうか。しかし、日本では、「サードプレイス」という言葉の方が「スターバックスコーヒー」と共に、先に入って来て一般化してしまいました。でも実は、レイ・オールデンバーグは「とびきり居心地の良い場所」と言いたかったのではないでしょうか。

「とびきり居心地の良い場所」を成り立たせるのは「パブリックキャラクター」であるということも、2013 年に和訳が出て、「そういうことを言っていたのか！」と納得しました。「パブリックキャラクター」とは、「近所のあらゆる人を知っていて、近所のことを気にかけている人物」だそうです。我々は「まちの居場所」を研究する時に、このような人物を主（あるじ）と呼んでいたのですが、レイ・オールデンバーグは「パブリックキャラクター」と呼んでいます。

先ほど、山納さんが「アメリカでは、あまりサードプレイスという言葉を聞かなかった。」とおっしゃいました。日本では、よく「サードプレイス」という言葉を聞くのですが、アメリカではあまり聞かない言葉であるとお聞きし、日本では流行り言葉のように使われている側面があるのだと、合点がいった次第です。

もうひとつの質問である「空間デザイン」についてお答えします。我々は空間、とりわけ公共空間をデザインし、マネジメントし、作り出していく立場にいますので、これはどうでもよいとは言えません。

私は、公共空間が「みんなの場所」であるためには、そこにいる人びとが公共空間と親密な関りを持っていることがとても重要だと思います。それは、みんながみんな、建築や都市計画の専門家ではないので、「維持・管理」や「修繕・改修」ほど大げさな関わりでなくても良いと思います。

そのような意味では、先ほど岡先生が「カフェ・おカフェ」で、「学生が、居心地の悪い椅子を作っている。学生は素人だから、そんなに居心地の良い椅子を作れるわけがない。」とおっしゃっておられましたが、私はむしろ、人びとと公共空間が、そのような「小さな素人的な関わり」を持っていることが重要だと考えています。

プレイスメイキング・居場所づくりの現場では、ほとんどの施主が素人であり、専門家ではありません。加えて、関連する人びとも素人であり、専門家ではありません。それでも、セルフビルドをやっていき、関連する人びとが公共空間と何らかの関わりを持って、続けていけるような「維持・管理」「修繕・改修」が重要であると考えています。もちろん、作れる人は作る役割を担うべきです。

あと、養老孟司さんが、「手入れ文化と日本」（白日社，2002 年）のなかで、「放置すればとんでもないことになるので手入れをするが、きちんとしたビジョンがあって手入れしているわけではない。」と述べておられます。これは、里山のようなところをイメージしておられるのだと思うのですが、農業や林業に従事する方にとっての「計画」とは、このような見通しであるようです。

相手は自然ですから、自然は自然のままで、思うようにならないのが当然です。それは、我々のように構築環境や実空間を相手にする職業からは考えられない見通しです。我々がこういうスタンスを取ると、「無計画」と言われ、「自然発生的なものをそのまま認めるのか」と言われてしまいます。

どうしても我々は、建築や都市の専門家としてのドグマに囚われていて、「都市を思うようにする」ために計画を立てます。また「都市をどうするつもりなのか」と絶えず聞かれます。

したがって我々は、計画的・構築的でなければなりませんが、私は、非計画的・自然発生的な面も持ち合わせていないといけないと考えています。つまり、両面が必要だと思っています。

また、必要なスタンスは「無計画」ではなくて、「非計画」です。「非計画」を少し詳しく説明すると、自然発生的なものや自然の良いところも織り交ぜながら、それでも計画していくという「綯い交ぜ」のスタンスだと考えています。

具体的には、「人びとの合目的的行動」と同時に、

「特に目的のない人びとの行動」も認めることです。「その行動や行為が何なのか」と具体的に言えなくてもいい。「別に何となく」「ふらりと」「何気なく」やっていることもあるので、そのような人びとの行動も含めた「現象」を認めていくことも大切だと思います。

また、「生活習慣」や「慣れ」「馴染み」、「みんなで何とかやりくりする」など、現実の公共空間で起こっている「現象」について、今までの建築計画や都市計画では、あまり議論されなかったと私は考えています。今は、そのような転換の時期に来ていると思います。

最後に、岡先生からの質問にお答えします。今まで「賑わい」や「祝祭」など、公共空間の「ハレ」の部分が目立ちすぎていて、今後、公共空間の「ケ」の部分へどのようにシフトしていくのか、それをどのように整理するのか、というご質問だったと思います。

私も、今まで「賑わい」や「祝祭」などの公共空間の「ハレ」の部分ばかりが議論されてきたように思います。都市空間で、人びとが集まっていることが上手くいっていること、良いことである。それで、経済が回っているのからこれで良いのだ、という議論が大勢だったと感じます。

しかし、「賑わい」や「祝祭」以外の、日常的で「ケ」的な公共空間利用は、本日お示ししたように、必ずあります。何かモノを買ったりしているわけではありません。買ってもそんなに大して買いません。

さりとて、「あんなの、なくてもいいじゃない？」とは言い切れません。人びとの日常的で「ケ」的な公共空間利用が前面に出てくるような計画やデザインのあり方を、今後はもっと議論しないといけないと思っています。

視聴者の発言

＜中村伸之＞

２つ感想を申し上げます。

一つは、都市の中の生態系という視点が重要ではないかということです。

これから人口減少や経済の低成長で都市に隙間が出来てくるので、そこに自然たぶん雑草とか自生種とかいろいろな自然が出てくると思うのですね。そういった自然を少し人工の側に引っ張るというか、手入れすることで豊かな場所が生まれるかと思います。

ですから今言っていたグッドプレイスの中に生物多様性とか、あるいは木陰があって涼しいとか、作り込まなくて、管理がそんなにいらない緑の要素があってもよろしいのではないかなというふうに思いました。

京都などでしたら、町なかに小さなお寺や神社が多いのですが、コミュニティが衰退して、維持管理が難しい。そのような問題も含めて、自然や文化の生態系を取り入れてはと思いました。

二つ目は、交流や賑わいよりも、基本は一人一人が満足できる場所づくりでいいんじゃないかということです。都市生活者が心が洗われるような経験をする場所、それは先ほどの自然の要素にも関わるかもしれないけれど、オフィスワークやテレワークに疲れて、表に出て、何かに出会い、心晴れやかになるような場所です。

人工物にかこまれていると非常に疲れるし、コミュニケーションも疲れるので、そのようなことから解放され一人になれる場所も必要ではないかというふうに思いました。以上でございます。

＜角野幸博＞

2020 年 5 月号の建築雑誌に「みんなの空間が公共空間を葬りさる」という記事がありました。岡部明子さんがハンナ･アーレント等の説を引用しながら、「公と私は二極的か、２元論的か」という問いを投げかけています。日本の公共空間をめぐる議論では公と私を二極的にとらえて、両極の間のグラデーションに「共」という中間的領域を見出して、これを「みんなの空間」にしようとする傾向がありますが、これは「日本的な似非公共空間」であり、これを公私二元論に当てはめると両者の壁を弱めて公共空間の危機を招くと指摘しています。

これはなかなか重要な話だと思っています。ハンナ・アーレントは２元論の立場を取りながら、公と私を明確に切り分ける壁があってはじめて、人は壁に守られた内（私）から外（公）に「現れる」ことができると言っています。また私的なものを囲う境界が空間性を持ち合わせているとも言ってます。

境界が異なるものを隔てつつ繋ぐという空間性は、日本人に受け入れられやすいように思いますが、グラデーションのなかにあいまいな「共」が存在するということではなく、公あるいは私の中に特定かつ同質の目的を持った人たちの共的空間というのが、作り出されているのだと理解する方がしっくりきます。

境界線を越える（行き来する）には、やはり２元論に基づくルールや手続きが求められるし、公または私空間のなかに形成される共的空間独自のルールも生まれてくるでしょう。公共空間のなかに何らかの手続きとルールを介在させることによって、特定のグループの場が存在しうるのではないでしょうか。

こういう議論をすると私はアンリ・ルフェーヴルの『都市への権利』を連想してしまいます。公的な空間なり都市空間でどのような主体がどのような意図でもって権利を行使するのか、あるいはそれを許容するのかというあたりのことをちゃんと議論しないとジェントリフィケーションの本質というのは、なかなか理解しづらいなというふうに思います。

＜井口勝文＞

僕が最近強く考えていることは、ライフスタイルです。それは、わたしたち計画する側が考えて提案しているライフスタイルではなくて、一般の、計画者ではない普通のみんなは一体どういうライフスタイルを望んでいるのか、どういう生活をしたいと思っているのだろうかということです。それも都市の公共空間で、オープンスペースで。

それが僕はよく分からない。それをどう考えたら

いいのでしょう？と、専門家である皆さんに質問したいのです。皆さんがどう思ってられるのか教えて欲しいのです。

僕たち、まちづくりの専門家が今一生懸命考えていること、実現しようと頑張っていることは、本当に一般の人が待ち望んでいるライフスタイルでしょうか？多分そうでしょう、残念ながら。それはそれでいいんでしょうが、別のライフスタイルもあるんじゃないでしょうか？それを提案するのも僕たちの役目ではないでしょうか？

でもそっちのライフスタイルは多くの人が望んでいるライフスタイルではないように僕には思われる。提案しても無駄のように思われる。でも僕たちは実はそっちの方に行きたいと思っていながら、実際には今やってるような提案で満足し、評価されて喜んでいる。僕が言う、今提案しているライフスタイルとは、商業主義のまちづくりで、別のライフスタイルは「居心地の良い」まちづくりです。

僕たちプランナーやデザイナーは、今日の話でもいくつも出てきましたけれど、公共のオープンスペースを使うということが前提で、その場所をどうデザインしたらいいか、どう使うのがいいか、という見方考えます。そうすると目的が、どうやって多くの人に来てもらうか、いかに盛んな賑わいをもたらすかを考えることになる。どうしても商業主義的になってしまう。それはまちづくりが商業主義で考えられているからそうなるんだ、それも居心地のひとつだと、言ってしまえばそれまでなんですが、そこで思考停止してしまうには自分が年を取りすぎてて、何か言いたくなってしまうんです。

今日もGood Placeの話が出ましたが、多くの人たちにとって「居心地のいい場所・Good Place」とはどんな場所でしょうか？

多くの人にとってそれはもしかしたら公共のオープンスペースではないかもしれない。一人になれる芝生広場ではないかもしれない。眺めのいいベンチではないかも知れない。そよ風の吹くカフェテラスではないかも知れない。屋外のレストランでの食事会ではないかもしれない。日本では3密がダメと言われて屋外や開放的な店が増えても、人がその良さを見直しているとは思えないからです。外出が禁止されていたヨーロッパのまちは、屋外や開放的な店を待ち望んでいたし、そんな場所に行くことが日常であり、どんなに重要なことかを改めて知りました。

日本では空調の利いた、雨の心配のない、小奇麗で洒落た室内空間や大きなアトリウム空間に、混みあった居酒屋やフードコートに人々は入ってしまう。ヨーロッパのようなGood Placeは大きなショッピングセンターで、都心の大型ビルの中で上手に作られている。それが日常で、普通は公共のオープンスペースにGood Spaceは求めない。

みんなの望むライフスタイルが、公共空間を居場所として使うライフスタイルなのか、あるいは空調の効いた居心地の良い大空間の中で、みんなで、あるいはバラバラでもいいから、そんなところで過ごした方が良いと考えるライフスタイルなのか。そうであれば公共のオープンスペースは公園があればそれで十分でしょう。多くの人でにぎあう市街地と落ち着いた公園の組み合わせが日本のまちづくりということになります。市街地のオープンスペースは安全に歩ければそれで十分ということになります。

そういうふうに、市街地の公共空間に限った話ですが、みんながそこでどういうライフスタイルを持ちたいと思っているのだろうかなぁと、それをみなさんどういうふうにとらえられているかを次の機会にでも聞かせてもらえたらいいなと考えています。日本のコロナの街を歩いて、ヨーロッパの状況を見て、僕はすごくそれが気になっているのです。以上です。

＜近藤紀章＞

今日は、非常におもしろい議論と示唆を、お二方の先生の話と岡先生、笹尾さんのコメントから、いただきました。

個人的には、作るまでの場所と作った後の場所があるなかで、どうやってその場所が続いていくのかというところが気になりました。

というのも、作っていく、あるいは作られた場所の評価指標の一つに、議論にもあった不動産価値が用いられます。しかし、これは、実際に使っている人の評価とは、ずれています。

そこで、私自身では、90年代に起こったソーシャルキャピタルの議論をふまえて、人と人のつながりを含めた新しい指標が考えられないかと模索しています。

そのなかで、今、私が住んでいるのは長浜の町なかですが、地方都市と大阪などの都市での状況を比較をしながら、笹尾さんらと議論を進めているところです。

まとめ

鳴海邦碩

大阪に来たレイ・オールデンバーグ

実は 2002 年に大阪で国際シンポジウムをやりました。テーマは「新・都市の時代―都市のリ・デザイン／行ってみたい都市の形成―」でした。ある本でオールデンバーグ教授（以下、O教授）のことを知り、招待したのです。「人を招く都市の姿」という基調講演をしていただきました。

O教授が、サードプレイス、グッドプレイスに着目したのは、アメリカではどこにでもあるようなお仕着せの都市空間が増えていることに対する危機感からでした。激しい人の移動、孤立、共同体のコンテクストから切り離されているという特徴、こうした状況が都市開発に反映され、都市は面白みのない平凡な場所になり、住む人も訪れる人も全く招かれているという気がしないところになった。

どうすればこういった荒廃から立ち直ることができるのか。そこでサードプレイス、グッドプレイスに着目したわけです。

サードプレイスとグッドプレイス

サードプレイス、第三の空間については、ご存知のように日本では社会学者の磯村栄一が論じました（1968）。家があって、働き場があって、そのいずれにも属さない空間、第三の空間の空間がある。第三の空間は喫茶店のような空間で、それが増殖すると盛り場になる。磯村に先立って清水幾太郎が働く場所と休む場所とが分裂、喫茶店等の発達について論じています（1952）。

O教授の、都市に人間的な魅力をもたらしたいという考え方からすれば、サードプレイスよりもグッドプレイスという言葉の方がより適切なのではないかと思います。

グッドプレイスには、小さな書店とか、カフェ、バー、女性のためにはヘアサロンといったものあります。O教授は大都市のなかで移民のコミュニティにそうした空間がいろいろあると指摘していました。移民たちが分断されないで、お互いに交流ができるような、そういう場所がグッドプレイスだということでした。

O教授は、研究者としてそのような空間を取り上げただけではなく、一種の運動として展開したようです。各地にグッドプレイスを愛好し、育てる会が生れたと読んだことがあります。

日本だと、グッドプレイスとしてすぐ連想できるのが赤ちょうちん、銭湯や床屋さん、美容院もそうだと思う。O教授と大阪や京都を飲み歩きました。どこも「グッド」という感想でした。アメリカの都市に比べ、日本の都市にはグッドプレイスが多いのかもしれない。

図１　大阪の居酒屋でＯ教授（右端）と

気にせずに居れる場所の重要性

サードプレイス、グッドプレイスについては、O教授は「パブリックキャラクター」が重要な役割を果たすと言っています。会話を重視しています。そしてそこにいる人たちは皆その場所に「はまっている」のです。一方で教授は、最近のビジネスマンは話をしないし、浮いてしまっていることが多いといいます。こういう人たちはスターバックスが似合う。だからO教授にとってスターバックスはグッドプレイスではないのかもしれない。

それに対して、笹尾氏は、会話を前提とせずに居心地の良さを感じられる「インフォーマルな公共生活」もあるのではないかと指摘しました。私たちは、「自分が社会的に存在しうるという実感を持ちたい」という欲求から、家を出て公共の場にいる。何をするわけでもなくその場に身を置いて他の人の振

る舞い・営みを眺めていられるのは、「自分がその場所に留まることを許されていると実感する」ことにつながる、ということでした。

以前、ブラジルのドイツ人の入植地を調査した時、住宅のポーチにどの家もイスやベンチが置いてあったことを思い出しました。ここに座って、通りを通る人を見るのが年寄りの楽しみだということでした。最近、私が住んでいるマンション街で、自分でイスを持ちだし、気に入った道端にイスをおいて、ぼんやり座っているおばあさんに気付きました。これも社会と結び付こうとする行動だと思います。

岡氏も、林田氏が「ケ」のような公共空間として紹介した、一人二人で公共空間を専用する状況を評価しています。人は居るが、大勢ではない。

存在することに意味がある空間

大勢の人が集まる賑わいの空間はビジネスとして造ることが出来る。しかし、上述のような「気にせずに居れる場所」はビジネスでは作りにくい。「空いていることに存在価値がある」のだから。

中村氏が指摘する「都市生活者が心が洗われるような経験をする場所、表に出て、何かに出会い、心晴れやかになるような場所」もそうした空間だと思います。

こうした空間を計画する時に、そこに何かの機能を与えるという方法が取りにくく、「存在価値」を公共的に認める必要が出てくると思います。

一方で、設計者が巧であれば、ビジネス的論理で造られる空間に、このような空間を紛れ込ませることが可能になります。そうした空間が内包していると魅力的になるのではないでしょうか。

岡氏が紹介した POPS（Privately Owned Public Spaces）の評価、角野氏が指摘した「日本的な似非公共空間」の評価もこの辺りの問題だと考えます。

ジェントリフィケーションについて

今日の話題の一つはジェントリフィケーションです。これはとても大きな問題で、私たち、まちづくりをやっている者にとって、環境を良くするのが目的の一つです。

環境を良くすると普通家賃が上がります。日本だけではなく世界中でプランニングして価値を上げる、その評価尺度の一番重要なのが不動産価値で、みんなこれを計算する。価値は不動産価値だけではないのに、不動産価値だけが目標になってしまっている。

図２　道端に座る人　御堂筋

図３　住民による環境改善　ジョグジャカルタ、インドネシア

もうだいぶ前のことになりますが、インドネシアに何度か調査に行きました。そのころインドネシアの都市では、スラムのようなところを住民たちが自分たちで環境を良くするという運動がありました。今もあります。日本でも昔は、町内会で環境整備、どぶ掃除などをやって、出来るだけ自分たちで住みよい町を作ろうとしました。

インドネシアの都市でこうした環境改善をやると、ほんの少しですが、家賃が上がる。そうすると住民が入れ替わる。ほんのちょっとでも家賃が上がると住み続けられない人が出てくる一方で、負担できる人が入ってくる。結果的に、環境を良くすることが、人を追い出すことにつながってしまう。しかし、こうした連鎖は環境が全体的に向上すれば止まってしまう。

『都市再生』を書いたロバータ・グラッツは、ジェントリフィケーションが連鎖していくことを評価しています。「慎み深い都市の変化は、必然的で健全である」と。

普通であれば、自分でお金を出して、自分の家を住みやすくするのが当然のことです。街にそれを当てはめればジェントリフィケーションになります。ジェントリフィケーションは環境を持続させる当たり前のことで、過剰に投資ビジネス化しなければ必然的で当たり前のことだと思います。近藤氏は「人と人のつながりを含めた新しい指標」の可能性を指摘しました。

林田氏は、「地域に残る空き町家を「歴史的まち資源」として見直し、みんなの『居場所』や『居心地の良い場所』にしていくべきだろう」と述べています。日本の都市のジェントリフィケーションの一つの課題です。一方で、山納氏は、「ジェントリフィケーションからも見放されているのが日本かもしれない」と述べています。つまり「自力更新」の力を失っているのかもしれないということ。考えてみなければならない指摘です。

人が居る画像の魅力～この人は誰だ

山納氏も林田氏も人が写った画像で空間を説明しました。とりわけ山納氏が紹介したパターンランゲージの挿絵について、笹尾氏も岡氏も「魅力が表現されている」と感じました。問題はこの「人」はいったい誰なのかということです。笹尾氏は「そこで暮らす人」と考えましたが、岡氏はPOPSの事例で近隣空間にいる「住人」とは思えない人を発見しました。この人も「そこで暮らす人」なのか。

笹尾氏は、パターンがビジュアルを伴わずに言語のみで表現される場合は、パターンランゲージの誤用が起きる、と述べています。もう少し吟味してみたいポイントです。

「ワシントンスクエアの様子はとても魅力的だが、その魅力は人のおかげなのであって空間のおかげではない（笹尾）」と考えた時、魅力的な環境を作るために人を集めることが目標になる。その延長線上にフェスティバルマーケットプレイスのような方法がでてきます。

マーケットがフェスティバルになって、フェスティバルマーケットプレイスが毎日行なわれている。毎日がフェスティバル、ハレのお祭りで、ケがもうないのではないか。それを変だなと誰も思わない。ケがないまちづくりになってしまったのは、フェスティバルが、つまりハレがビジネスになってしまったからだ。毎日がお祭りの人生も面白いかもしれないが、何か美意識に欠ける。

図４　「花のもとにて春死なむ」。都市空間を繊細な心でもって見つめる眼力が必要。田端修

井口氏は人がどのような公共空間を求めるかは、その人のライフスタイルに関連していると述べました。問題は、そのライフスタイルが自力的か他力的かということだ。いわゆる環境の「インスタ化」は場所を画像化してしまう。それをどんな画像を選ぶかがライフスタイルになる。消費する他力的なライフスタイル。

結び

冒頭のプレゼンの中で、そこら中にショッピングモールがありショッピングモールが日常化していて、シンガポールへ行っても、香港へ行っても上海に行ってもみんな一緒という状態が今はピークになっている。こうした環境変化について、公共空間とのかかわり方、あるいは公共空間の価値づけの観点から新しい目で点検してみたいと述べました。

それを受けた山納氏と林田氏のプレゼンを素材として、意義のある考察が出来たのではないかと思います。ここで得られた新しいヒントをさらに展開していきたいと考えています。